木戸幸一の立山登山
―旧侯爵木戸家資料「明治四十四年　當用日記」に見る明治末期の登山―

岡田　知己

はじめに

木戸幸一（1889-1977）は、大正から昭和にかけての官僚・華族政治家である。その木戸が明治44年（1911）に立山を訪れ、登山の様子を日記に書き残していると、一般社団法人霞会館華族文化調査委員会研究員の松田好史氏から教示を得た。調べたところ、日記は、国立歴史民俗博物館が収蔵する「旧侯爵木戸家資料」に含まれる「木戸幸一日記」の中の「明治四十四年　當用日記」であることが判った。

一方、在地の資料にも木戸幸一の名は見え、木戸が立山登山を目的に芦峅寺を訪れたことは以前から知られていた。今回確認された日記は、この立山登山の内容を知ることのできる、他に得難い資料であった。

この報文では、当該日記に記された立山登山に関わる部分を翻刻し、記述内容の解説を試みる。登山の道中に、若き木戸は何を見、何を感じ、何を書き留めたのか。以下、木戸幸一の日記を読み解き、立山に登山し、北アルプスを横断した木戸の山旅をたどることにする。

１．明治時代の登山事情と学生の登山

明治時代の到来とともに、外交官、政府招聘の技術者・研究者、布教目的の宣教師、商人などの外国人が近代登山を日本にもたらし、実践した。近代登山とは山へ登る行為そのものに意味を見いだすことであり、その意義や喜びが伝えられていった。そして、在日外国人（団体を含む）と日本人との交流が深まったことや、留学生の活動を通して、近代登山は、上流社会・知識階級へと次第に浸透してゆく。

明治27年（1894）に、日本近代登山史の黎明期を語るに欠かせない『日本風景論』が刊行された。本書は、地理学書、国土愛を説く思想書、当時唯一の登山案内書・登山技術解説書であり、本書の刊行が登山奨励の大きな契機を作ることとなる。著者は札幌農学校出身の志賀重昂。ここでは「山」というものを日本的情緒の伝統に讃美される山水美の象徴として据え、地理学を以て科学的論拠を与えている。附録に「登山の氣風を興作すべし」と題する登山案内・登山術解説を備え、知識階層を中心に広く受容され、登山普及の機運醸成に貢献することとなった。本書による登山勧奨の影響は大きく、刺激を受けた旧制中学の教師の指導によって生徒による最も早い組織作りがなされ、後述する日本山岳会も、先行する東京府立一中の日本博物學同志会を母体として生まれた。このように、登山愛好者を育てることに大きく貢献した本書は、各版毎に若干の増補を加えながら36年の15版まで出版された。

また、『日本風景論』刊行前後に、相次いで様々な紀行書が刊行されていく。戸隠山登山の興奮を率直に著した山田美妙の『戸隠山紀行』（明治23年）、奔放な旅の描写のうちに明治人の山水への親しみが滲み出た幸田露伴の『枕頭山水』（26年）、当時画期的といわれた紀行文「富士の高根」を収める遅塚麗水の『日本名勝記』（上・下、ともに31年）、増補版・続編併せて数十版を重ねるほど人気を集めた大橋乙羽の『千山萬水』（32年）、名登山紀行「雪の妙義山」を収める田山花袋の『南船北馬』（32年）、自然美の描写が高く評価される徳富蘆花の『青蘆集』（35年）等が知られるところであろう。これら紀行書に見られる日本の自然美に触れる喜びや郷愁の風景を情感豊かに描く文章は、近代化の進展とともに増え続ける都市生活者の心に響き、田園逍遙や登山の機運醸成に大きく寄与した。

明治30年代に入ると、前述の紀行文学を追うように登山家の著した山岳書の刊行が相次ぐ。その只中に

日本山岳会が設立され、その後の山岳書出版に大きく関わっていった。30 年代後半以降の山岳書を列記すると、野中至の『富士案内』（34年）、エチ．ジー．ポンテングの『富士山』（38年）、高頭式の『日本山嶽志』（39年）、小島烏水著・丸山晩霞畫の『山水無盡藏』（39年）、丸山文台・高嶌胖園・野本紫竹の『槍が嶽乃美觀』（39年）、志村烏嶺・前田曙山の『やま』（40年）、大井冷光の『立山案内』（41年）、志村烏嶺の『高山植物採集及培養法』（42年）、日本山岳会編の『高山深谷第一輯～第八輯』（明治43－大正６年）、小島烏水の『日本アルプス』全４巻（明治43－大正４年）、志村烏嶺の『千山萬岳』（大正２年）等がある。このうち特筆すべきは高野鷹蔵を中心に日本山岳会が編集した『高山深谷』である。各輯とも山岳写真のオリジナル・プリントを貼付けたアルバム仕立てで、趣向を凝らした装丁の高価な写真集であった。

日本山岳会の設立は、近代登山を主導する組織の誕生であり、一般に広く門戸が開かれることとなった。早くも会設立の翌年、明治39年には会誌「山岳」が創刊される。会員には、各地で登山の唱導を担った旧制中学の教師や旧制高校の教授なども早くから所属していた。

明治時代の旧制中学・旧制高校の登山組織設立年を見ると、四高・遠足部の31年、東京府立一中・日本博物學同志会の34年、府立京都二中・登嶽部の39年、東京高等師範付属中学・山岳部の45年などである。また、40年代には長野中学舎友会など、山岳会と同様の活動を始める組織も出てくる。このように、四高遠足部以外はすべて旧制中学の事例が占めており、他の旧制高校と帝国大学においては、以前からあった教授や学生の私的活動は別として、明治期に登山組織は未設であった。

ここで、日本で最も早く設立された山岳団体と言われる四高遠足部（のち旅行部を経て山岳部）について、少々付言しておく。

四高旅行部が早くから旧制高校の山岳団体として活動できた背景には、「育ての親」といわれる同校教授、林並木の存在があった。当初、学校教育の一環として設立されたと見られる遠足部に、いち早く創造的登山精神を導入したのが林並木である。東京帝大英文科を明治31年に卒業し、35年に四高に赴任、翌36年には早くも遠足部第二代部長となった。遠足部は翌年旅行部となるが、林はその後も部長を長く務め、部員のみならず広く四高生に慕われたという。39年に林は日本山岳会に入会（会員番号49）、自ら登山のパイオニアワークを実践し、同年、鵜殿正雄に次ぐ穂高岳早期登頂者となるほか、各地の山岳に足跡を印した。在地の資料「泉蔵坊宿泊帖」にもその名を残している。一方、この林並木のもとからは多くの山岳家が育っており、たとえば、登山を伝統的な漂泊観に結びつけた「静観派」の田部重治や、剱岳民間人初登頂（42年）で知られる３名、吉田孫四郎・河合良成・野村義重がいる。河合良成は『明治の一青年像』（昭和44年）のなかで当時を回想し、「山岳通で日本に名の通った林並木先生。この先生は山岳熱を盛んにわれわれに吹きこんだ日本山岳界のパイオニアであった」、「林並木先生や田部隆次先生の影響を受け、立山、白山、医王山などへもしばしば登り…」と語っている。引用文中の田部隆次はラフカディオ・ハーン研究で知られた英文学者で、四高教授ののち学習院教授（明治40年）ほかを歴任した。その弟が田部重治で、後年、英文学者・登山家として活躍し、『山と谿谷』を著す。この表題は、昭和５年創刊の山岳雑誌「山と谿谷」の雑誌名になる。

このように、登山活動は旧制中学・旧制高校の生徒・学生から徐々に拡散浸透し、各地で一般の山岳団体設立の動きへとつながった。そして「大正登山ブーム」へと向かうのだが、明治末期はその前兆期といえよう。このような時代の気風を受け、様々な山岳団体の設立が始まった。地方の登山愛好団体を見ると、飛騨山岳会（明治41年）、名古屋愛山会（42年）、神戸草鞋会（43年）、信濃山岳研究会（44年、のちの信濃山岳会）と、徐々に設立されている。また、在日外国人による山岳団体設立の例も見られ、40年頃に結成されたMountain Goats of Kobe（M.G.K）は、H.E.ドントとJ.P.ワーレンが中心となり精力的な活動を展開した。

次に、大正時代に入ってからの旧制中学・旧制高校の山岳組織設立の事例を見ておくと、四高に続いて、大正２年（1913）、一高に陸上競技部の一部門として「山岳会」が発足し、翌年旅行部として独立した例がまず挙げられる。その後、三高山岳会の２年（12年に山岳部）、二高山岳会の３年と続き、４年には、京都府立一中山岳部、神戸高等商業学校山岳部、七高山岳部、八高山岳部などが設立された。四高を除く全ての

旧制高校の山岳組織は大正に入って以降の発足である。

次に、大学山岳部の設立ついて簡単に触れておく。大学については、制度上の属性が変遷して錯綜するため、ここではその点に触れない。旧帝大７校（内地）では、北大の札幌農学校時代にスキー部が最も早く大正元年に創部、のち15年に山岳部が分離独立する。これは、競技スキーが導入されたことでスキーと登山を分離することになったものである。他大学の山岳団体は、いずれも大正後期以降の創部となる。また私学では、それより早く、４年の慶應義塾山岳会、９年の早稲田大学山岳会設立の例がある。

一方、社会人の山岳団体は前述した団体のほかにも増え始め、登山スタイルの多様化も始まり、旧制中学教師による山梨山岳会（大正２年設立）のような職域団体も活動を始める。また、神戸では注目すべき状況があった。登山史研究家布川欣一氏の言葉を借りると、４年に開催された「日本山岳会関西大会を契機に、低山彷徨を楽しもうとする市民が地域の山に密着、アルコウ会など風変わりな名の組織を多数生み、百花繚乱の状況を呈する」のである。活動の目的をより特化した団体も現れ、８年には「深林と谿谷」の漂泊を標榜して低山趣味に徹する霧の旅会が東京で発足し、13年に神戸では外国人達の岩登りに刺戟され、藤木九三を中心にロック・クライミング・クラブ（ＲＣＣ）が設立された。このように、大正期に登山趣味は広く拡散浸透して大衆化し、登山観も多様化すると同時に深化していった。

この時期、産業構造の大きな変化は製造業とサービス業の就労人口を増加させた。報酬を得て衣食住が賄われる近代的な都市生活は、人々を自然から疎外することとなったものの、余暇・休日を得た人々は、山岳趣味や登山活動を求めるようになっていった。その背景には、第一次世界大戦で戦勝国となり、国際的な地位を高められたことによる経済発展と、明治期から続く産業の近代化があった。

２．学習院の登山

学習院は、明治10年（1877）創立の華族学校として始まり、17年に宮内省直轄の官立学校となった。やがて、昭和22年（1947）に私立学校となり、現在に至っている。学習院は組織的な登山活動を他に先駆けて展開し、日本近現代登山史においては名門として名高いが、その登山活動の背景には幾つかの絡み合った要素が存在した。以下、『学習院登山史（Ⅰ）』を適宜参照しつつ学習院の野外活動の動向をたどる。

学習院には、「本院文武活動の中心」的機関として明治22年に設立された輔仁会という組織がある。在学生にとって様々な課外活動の拠り所であり、野外活動も輔仁会のもとに行われた。輔仁会旅行部（山岳部、スキー部）の正式な創部は大正８年（1919）と、他の旧制中学・旧制高校に比べて遅いが、それ以前にも登山活動は輔仁会のもとに行われていたという。創部以前から旅行部、山岳部、スキー部などの名称が学習院輔仁会誌に見え、創部は「輔仁会に承認されたという、手続き上の単なる通過点」と考えられている。輔仁会設立以前にも学習院関係者の登山活動はあったようで、何を以て、何時を以て、学習院輔仁会旅行部の活動開始とする、という時期の設定は困難であるとされる。それは、『学習院登山史（Ⅰ）』に、輔仁会誌「山桜」１号に収載された松方三郎の「随想」から引用して「学習院登山史を書くならば「学習院山岳部がいつできた等ということではなく、山岳部員のみならず、本院関係者が学習院登山史にどう関わり、院外の登山者ともいかなる交友を持ったかという史観に立つべきだ。」という点に凝縮される。」と記されている。

輔仁会誌に登場する学習院関係者の最初の登山記録は、明治 20 年の、田中阿歌麿と近衛篤麿がそれぞれヨーロッパアルプスに登頂したものである。「西部アルプス・サン・ゴタルード山群ピッツォ・セントラール」に登頂した地理学者の田中阿歌麿は28年から華族女学校の教官を務め、同女学校の学習院併合で39年から学習院で教鞭を執った。スイス、イタリアをトレッキングし「ヴェンゲルンアルプ、クライネシャイデック、エギッシュホルン」に登頂した近衛篤麿は、学習院の第７代学習院院長（28年～37年）を務めている。また、留学や様々な目的での海外渡航を経験した学習院関係者も珍しくなかったに違いなく、登山についても最新の海外動向・情報がもたらされたことであろう。

第10代院長（明治40年～大正元年）を務めた乃木希典は、海に山に野外活動を奨励した。赤褌の遠泳を課したり、後の学習院へのスキー導入につながるスキー熟達者レルヒ（オーストリア＝ハンガリー帝国陸軍少佐）のスキー講習受講（明治45年）を支援したりと、熱心に学生を野外へと導いた。乃木の真意は、将来この国を担うであろう皇族･華族の子弟の心身鍛練にあったと目されるが、登山にとっても有益となった。なかでもスキーの導入は、登山にとって対象の季節と地域の拡張を意味した。野外活動の先端にあった学習院旅行部は、大正期に入ると、板倉勝宣や松方三郎などが慶應義塾山岳部との交流を通してスキーや岩登りの技術を磨くことで「大正登山ブーム」の前衛となり、「岩と雪の時代」の登山を牽引することとなった。

ところで、ここで扱う日記を記した木戸幸一は、明治28年に学習院に入学。初等科・中学科・高等科と16年を過ごし、学習院生８名がレルヒからスキー術を受講する前年の44年４月に卒業、同年夏に立山を目指した。上述のように、学習院の登山活動は日本登山界の最先端にあり、木戸は、登山愛好の空気を身近に感じることのできる場に学んだことになる。実際に山へ登る機会もあったであろう。しかし、登山に対する想いが如何ばかりのものであったかを推し量ることは、かなり難しい。なぜなら、木戸の名前は、日本山岳会の会員名簿にも、「山岳」の記事の執筆者一覧にも見えないのである。

３．官僚・華族政治家　木戸幸一

木戸幸一は、明治22年（1889）７月18日、侯爵木戸孝正の長男に生まれた。幸一の父・木戸孝正は、長州藩士・来原良蔵と、木戸孝允の妹・治子の長男で、弟に正二郎がいた。正二郎は木戸孝允の養嗣子となったが、24歳で死去したことから、長男の孝正が木戸家を継承することとなった。

明治44年４月学習院高等科を卒業、同年９月に京都帝大法科大学政治学科に入学。大正４年（1915）にこれを卒業し、同年に農商務省に入省するが、６年、父の死去により28歳にして襲爵、貴族院議員となった。昭和５年（1930）には、近衛文麿・岡部長景ほかの推めで内大臣秘書官長に就任、８年からは宮内省宗秩寮総裁を兼任するが、11年に内大臣秘書官長職を辞して宮内省宗秩寮総裁専任となった。

木戸幸一は、最後の元老西園寺公望の死後、首相指名の最重要人物として、第二次近衛内閣から幣原内閣までの７代６名〈近衛（第二次・第三次）・東条・小磯・鈴木（貫太郎）・東久邇・幣原〉の成立に関わる。第二次世界大戦前夜の動乱の時期、よく内大臣を補佐して西園寺の信任を得、昭和12年に文相として第一次近衛内閣に入閣。以降、13年には厚相を兼任、のち厚相専任。14年には内相として平沼内閣に入閣。15年には、辞任した湯浅倉平のあとをうけて内大臣に就任。敗戦に至るまで国家の枢要にありつづけ、太平洋戦争の開戦時から終結に至るまで天皇の側近として補佐にあたったという。

昭和20年､敗戦によって内大臣府は廃止。木戸は､Ａ級戦犯として逮捕され､巣鴨に収監される。23年には､極東国際軍事裁判（東京裁判）にて終身禁固の判決を受け、服役した。なお、東京裁判では、昭和天皇の戦争責任などに関して､自らの日記などを証拠として提示している｡30年､健康上の理由から仮釈放され､33年､減刑による刑期満了によって自由の身となるも政界から退き、52年４月８日に87歳で死去。まさに激動の明治・大正・昭和を、国家の枢要に身を置いて生きた生涯であった。

以上、『国史大事典』･『企画展示　侯爵家のアルバムー孝允から幸一にいたる木戸家写真資料ー』･『木戸侯爵家の系譜と伝統ー和田昭允談話ー』などを参照し、その生涯を概観した。

４．「木戸幸一日記」と「旧侯爵木戸家資料」

ここでは､『国史大事典』と『国立歴史民俗博物館資料目録［10］旧侯爵木戸家資料目録』に依拠して､「木戸幸一日記」と「旧侯爵木戸家資料」に関する概要を述べる。

通常「木戸幸一日記」といえば、『国史大事典』によると、「木戸日記研究会（代表者岡義武）編纂刊行、

『木戸幸一日記』上･下、『木戸幸一関係文書』（昭和四十一年（一九六六））、『木戸幸一日記』東京裁判期（同五十五年）の四冊」のことを指す。同事典で当該４冊の内容を見ると、まず『木戸幸一日記　上巻』・『木戸幸一日記　下巻』は「木戸が内大臣秘書官長、宗秩寮総裁、文相、厚相、内相、内大臣として政治上の重要局面にたずさわっていた昭和五－二十年の十六年間のもの」、次に、『木戸幸一関係文書』は「木戸幸一の所蔵する文書の中から政治史的に重要な価値をもつものを選択編集したもので、木戸の戦後の回想を含め、公文書・意見書および木戸宛の書翰などを収めている」もの、さらに、『木戸幸一日記　東京裁判期』は「昭和二十年十二月十五日から同二十三年末に至る。おおむね東京裁判の時期の獄中の日記のほか、木戸のために準備された宣誓供述書草稿、獄中および釈放後の各種木戸の談話記録などを収録している」もの、である。このように「木戸幸一日記」とは、「いわゆる昭和の動乱期に、元老や近衛文麿らと密接な関係をもち、特に太平洋戦争期に天皇の側近者であった」者による記録として、わが国の昭和政治外交史上、重要な資料の一つに位置づけられた日記といえよう。

一方、国立歴史民俗博物館は、木戸孝允、木戸正二郎、木戸孝正、木戸幸一の、木戸家４代を中心とした膨大な資料を収蔵しており、これを「旧侯爵木戸家資料」といい、目録番号にもとづく資料件数は15,171件に及ぶ。この「旧侯爵木戸家資料」は20の項目に分類されており、その分類項目番号３が「木戸幸一日記」であり、その膨大な資料のうち294件が当該項目に分類されている。その概要は同資料目録によれば「少年時代から晩年に至るまでの幸一の日記。また、学習院時代の試験答案用紙など、間に挟まっていた大量のメモ類もある。大判の日記や小型の手帳もある。一部については、『木戸幸一日記』『木戸幸一日記　東京裁判記』として翻刻・刊行されたもの」である。

５．旧侯爵木戸家資料「明治四十四年　當用日記」に見る明治末期の立山登山

今回翻刻を試みる資料は、国立歴史民俗博物館所蔵「旧侯爵木戸家資料」に含まれる「明治四十四年　當用日記」である。上述の『旧侯爵木戸家資料目録』には、資料目録「３　木戸幸一日記」、番号「3-14-1」、表題「明治四十四年　當用日記」、年代「明治44.1～12.」、西暦「1911」、差出人「（木戸幸一）」、受取人［空白］、形態「ペ冊」、数量「１」と記載されており、備考として「明治43年12月博文館発行の「當用日記」にペン書き」とある。凡例によれば、形態の「ペ冊」の「ペ」は「ペンで記されたもの」、「ペ冊」の「冊」は「製本されたもの」を指す。

以下、「明治四十四年　當用日記」の７月17日から７月26日までの10日間について全文を翻刻し、明治44年（1911）の木戸幸一による立山登山旅行についての記述内容を紹介する（７月17日は登山準備。７月18日の夜行列車で新橋駅発、立山登山を経て、７月25日に信州大町の対山館着、26日は記載なし）【図１～５参照】。

例言

翻刻は以下による。

・資料は、国立歴史民俗博物館発刊『旧侯爵木戸家資料目録』に見える「木戸幸一日記」の「明治四十四年　當用日記」である。詳細は本文参照のこと。
・木戸幸一が明治44年に用いた当該「當用日記」は、明治43年12月に博文館が発行した既製品で、１頁に１日分を充てる。
・今回の翻刻対象は、「明治四十四年　當用日記」の一部、「二〇六」～「二一五」頁、すなわち明治44年「七月十七日」～「七月二十六日」に記された記録である。当該部分は木戸幸一ほか２名の立山登山行を木戸幸一自身が記録したものである。
・１頁の記入欄はすべて罫組。矩形外枠を子持罫で画し、外枠上辺内側に横一列に並ぶ項目見出欄は５欄。

右から、当日曜日［表罫］当日干支［二重罫］当日月日［二重罫］天気記入欄［表罫］寒暖記入欄、と並び、欄下底は裏罫にて以下の領域と画される。当日曜日・当日干支・当日月日は活字印刷済、天気欄・寒暖欄は、「天氣」・「寒暖」と欄右寄せに縦書活字印刷済で、欄内当該縦書活字左側に天気・寒暖を記入する空白がある。当日曜日・当日干支・当日月日、の３欄の下に日記記入本欄の縦 10 行が縦表罫にて区画される。天気・寒暖の２欄の下には、短冊形の領域を二重罫で上下に二等分して「發信」（上）・「受信」（下）の通信発受の備忘欄がある。「發信」・「受信」の欄見出語欄は、当該内上端に表罫にて下辺を画される。なお、横書文言は右起こし。

・日記の記事本文はすべて万年筆による縦書で、本文欄10行で書ききれない場合は、「發信」・「受信」欄領域にそのまま続けて行取りしている。翻刻では、印刷の都合上、これを横書きに改めた。
・翻刻においては、当該資料の各頁写真と翻刻文との対応関係の確認を容易にするため、日記本文表記の１行を、そのまま翻刻でも１行で表現した。
・割込み（挿入）や書足しは、本文行に繰り込んだ。割込み指示線・吹出し指示表現などは翻刻から省いた。
・取消線・塗抹等による文字抹消部分は、原則として翻刻本文から省いた。
・原則として、ㄱ［コト］などの合字等は通常の仮名表記に開いた。
・標準表記から逸脱した表記、意味の汲みにくい表記、誤記と断定できかねる表記等については「ママ」を振った。
・一般的な読みやすさに配慮して、校訂者の判断で、一部の漢字等に振り仮名を附した。
・「々々」以外の２字以上の繰り返し記号は、記号を廃し表記の繰り返しとした。
・存否の確認できない文字、現代の印刷に用いられる標準的なフォントセットにない文字は、前者については同義と推定される最も形状の近い文字、後者については標準的なフォントセットで扱い得る同義の文字でこれに代替した。
・句読点は、原表記を尊重しつつも、翻刻文章の読みやすさに配慮し、記述内容の構造と文意とにより、また、文章中の空白・筆勢による付点などを勘案し、必要に応じて校訂者がこれを付け直した。
・本文には、現在の倫理観・社会通念に照らして不適切と思われる表現も含まれるが、資料の時代性に鑑み、校訂の手を加えなかった。
・翻刻は吉井亮一による。翻刻の校訂には松田好史氏のご教示を得た。最終校訂は岡田知己による。

５－１　『明治四十四年　當用日記』 7月17日　月曜日 【図１（見開き右頁）参照】

月曜　　戊子　　七月十七日　　天氣　曇　　寒暖　［記載なし］

御前七時頃起床。小六ト共ニ銀座通リニ買物ニ赴ク。

鍋、コツプ、磁石等ヲ求メテ十二時頃帰宅ス。

夜ハ荷造リニ費ス。

十一時就床

○自宅

登山へ出発の前日である。午前中の銀座での買い物は装備品の買い足し、夜の荷造りは、登山装備品を別送するための準備であろう。

木戸幸一は明治44年（1911）４月に学習院高等科を卒業、同年９月に京都帝大に入学している。当時、小学校や旧制中学、師範学校などは４月入学に移行していたが、各帝国大学は９月入学を堅持していた。小六は幸一の弟木戸小六（1890-1952）である。小六は大正８年（1919）に木戸孝允の生家である和田家を継いでいる。兄幸一と同じ明治 44 年に第一高等学校から東京帝大工科大学に進学、大学院では航空工学を研究、欧米留学を経て、12年東京帝大教授に就任。昭和７年（1932）には東京帝大航空研究所所長、19

年に東京工業大学学長となった（国立歴史民俗博物館「企画展示　侯爵家のアルバム　－孝允から幸一に至る木戸家資料写真－」展示解説図録による）。

木戸幸一・小六とも、大学入学前の余暇を利用して立山に登ったものと思われる。

５－２　『明治四十四年　當用日記』　7月18日　火曜日　　【図１（見開き左頁）参照】

水曜　　己丑　　七月十八日　　天氣　曇　　寒暖　［記載なし］

午前七時頃起床。荷物ハ午前中ニ送リ出セシ故、別ニ用事モナク雑誌等ヲ見テ
暮ス。午後三時頃、高橋是孝君来訪。約一時間ニシテ帰ラル。夕食ハ
福田房男君モ共ニ一同ニテ会食シ、其レヨリ六時半頃出発ス。一行ハ、小六ト福
田氏ト都合三人ナリ。七時前、新橋停車場ニ至リシニ、既ニ乗客ハ各
改札口ニ列ヲナシテ集マレル有様ニテ混雑思ヒヤラル。ヤガテ改札始マリシ故、吾等
ハ最モ先ノ三等車ノ一隅ニ馳セテ漸ク席ヲ得タリ。石黒九一君モ亦、不圖（ハカラズ）モ
同車セラレ、吾等米原ニテ乗換フル迄ハ同行シタリ。福田君所持ノ太陽、
中央公論等ヲ讀ミシガ、汽車ノ國府津ヲ過グル頃ハ既ニ眠リ、半睡
半眠ノ中ニ夜ヲ過シタリ。

○自宅発～新橋停車場～夜行列車車中泊

日記の記述から一行は木戸幸一・木戸小六・福田房男の３名と知れる。日記に記述はないが、この日７月18日は木戸幸一の誕生日で、このとき木戸は22歳、９月の京都帝大政治学科への入学が決まっていた。

木戸一行は、新橋から東海道線の列車に乗り、米原に向かった。明治５年（1872）に日本初の鉄道路線として新橋（後の汐留）－横浜（現桜木町）間が開業しており、その後29年には新橋－神戸間の急行列車の運行が開始され、33年には寝台車、34年には食堂車の連結も始まっていた。日記には午後７時前に新橋停車場に到着し三等車に乗車、と記される。「明治四十三年五月／列車時刻表／鐵道院営業課」（明治大正鉄道省列車時刻表［２］：新人物往来社）には、午後7時30分発神戸行きの急行列車があり、「一二等車連結ナキ列車」「和食堂車ノ連結」等を示す記号が付されている。

午後の来客、高橋是孝は、東京高等工業学校化学科卒、のち英国オックスフォード大学機械科に学ぶ。ボルデイ製鋼所日本支店長を務めた実業家で、26年生まれで当時18歳。父の高橋是清は、明治から昭和時代前期の財政家・政治家で、内閣総理大臣や大蔵大臣をつとめた。

列車に偶然乗り合わせた石黒九一は、貴族院議員石黒五十二の長男で、24年生まれ。学習院高等科から京都帝大に進学、後に三菱電機常務取締役から顧問を歴任した。

５－３　『明治四十四年　當用日記』　7月19日　水曜日　　【図２（見開き右頁）参照】

水曜　　庚寅　　七月十九日　　天氣　晴　　寒暖　［記載なし］

午前七時頃、米原ニ着。下車、泊行ニ乗換フ。天気好シ。舞
鶴、敦賀辺リ、北海道小樽附近ノ景ニ似タルモノアリ。曽遊ノ
地ニ来タリシガ如キ感アリ。小舞子ノ濱ト云フ海水浴場ヲ過グ。海水浴
ニハ可成ナランモ、名前ハ甚ダ気ニ入ラズ。名等ハ却ツテ無クモガナト思フ。
午後四時半過、富山ニ着。下車、直チニ町ヲ神通川ノ方ニ向ヒ
テ行ク。神通川畔ニ神通舘ナル旅宿ヲ得テ宿シ、先ヅ荷物ヲ
停車場ヨリ取寄セシム。部屋ハ川ニ面シ、遙ニ川ヲ隔テヽ立山ヲ望
ム等、景ヨケレド襖一重ノ隣リハ普請中ニテ頗ル不安心ナリ。
夕食後町ヲ福田君ト散歩シ、乾魚、草鞋等ヲ買求ム。九時就床。

○米原着・乗換～富山着～神通館泊

米原で泊行に乗り換え、一路富山を目指した一行は、好天のもと、車窓の景色を楽しんだ。敦賀辺りでは、「曽遊ノ地ニ来タリシガ如キ」と感慨を述べる。この当時、北陸本線は海側に迂回しており、途中の杉津駅からは敦賀湾越しに日本海の眺望が楽しめた。一方、手取川河口近傍の小舞子海水浴場に対してはなかなか手厳しく、「名前ハ甚ダ気ニ入ラズ。名等ハ却ツテ無クモガナト思フ」と記す。歴史ある播磨の「舞子浜」にあやかり、本家に準ずる意味で、「小舞子ノ濱」と称した了見が気に入らぬ、そんな名前を付けるくらいなら、まだない方がよかろう、というわけだ。

富山駅には午後４時半過ぎに着。先述の時刻表には当該列車の富山到着時刻は４時45分と記載される。

明治32年（1899）に婦負郡桜谷村田刈屋に仮の駅である富山停車場が開業している。これは、頻繁に氾濫した神通川の流路改修工事、いわゆる馳越線工事が34年に着工することから、その工事の影響を受けない現在の神通川西岸、現富山市田刈屋に設置されたものである。工事は36年に完成し、41年には、富山線の富山－魚津間が開業すると同時に現在の位置に富山駅が設置され、田刈屋の旧富山駅は廃止された。また、神通川分流計画による新設流路の馳越線が現在の神通川本流へと成長するのは、大正時代に入ってからである。44年当時の富山駅は現在と同じ場所にあり、駅周辺を含め、馳越線（現在の神通川）と当時の神通川本流（現在のいたち川や松川）に挟まれていた。ところで一行は、神通川河畔にある神通館に宿泊したとあるのだが、大正２年に富山ホテルが発行した『富山案内』には、その所在地は七軒町と記載されている。なお日記には、「遙ニ川ヲ隔テヽ立山ヲ望ム」とあり、神通川左岸から風景を見たと記されているようにも読めるが、はっきりしない。この点についてはさらなる考証が必要である。また同書には、当時の富山市内の主な旅館として、富山ホテル、富山館、高松屋旅館、舟山館、堀旅館、明治館、井原屋、神通館、堀佐、さわや、北越館などが記されている。

５－４　『明治四十四年　當用日記』　7月20日　木曜日　　【図２（見開き左頁）参照】

木曜　　辛卯　　七月二十日　　天氣　晴　　寒暖　［記載なし］

午前四時半起床。幸ニ天気ハ晴朗ナリ。荷造リモ出来、旅宿ニ頼ミ置キシ運送ノ
車モ来リシ故、五時四十五分出発。富山市ノ、縣廳城跡等目拔ノ場所ヲ通リ
テ、ヤガテ田舎道ヘト出タ。山麓ノ道ハ何處モ同ジコトダガ田ノ中ノ一本道デ、影
トテハ少シモナク、実ニ退屈スル道デアル。然シ幸ニ荷物ノ車引ガ四十年前ニハ東京
デ角力デアツタト云フ今年六十一ノ気軽ナ老爺デ、ヨク談ジ、昔話、宮ノ越
デ俠客ノ始メタ天下取リニ二百名ノ大名トナツタコトナド面白ク話スノデ、直キニ
上瀧ニ着イタ。隧道ヲ「マンブ」クリヌキト云フト敎ハツタノモ此老人カラデアル。此辺ノ
百姓ノ部落ハ皆樹木所謂（イハユル）防風林ニ嚴重ニ取カコマレト（ママ）、外カラ見ルト只ノ森
カノ様ニ見ヘル。上瀧デハ一茶店ニ憩、此處カラ芦峅寺迄ノ人夫ヲ依頼シタ處
ガ、数日来ノ雨ノ為メ常願寺川ハ溢レ、橋ヲ流シタル為メ、其方ニ若者ハ皆出向
イテ居ツテ無イトノコトナリシガ、ヤガト（ママ）仲吾（ママ）ノ頭、取締ト云フ一見魁偉悪相ナル
者ガ来タ。之ハ以前ハ東京デ角力ナリシトカニテ、先ヅ最初ニ「ワシノ親分ハ之デモ花川戸
ニ居リヤスノデ」等ト切出ス所頗ル危險人物ナルガ、漸ク談判纏リテ、一人ナレバ壱円、二
人ニテ運べバ壱円十五銭、トノ約束成立ス。ヨツテ余等ハ直チニ出発、橋梁破損ノ為メ
川ノ右（ママ）岸ヲ迂廻シテ亀岩ニ出デ、十二時半ニ芦峅寺佐伯忠胤氏方ニ着ス。非常ニ快
ヨク引見セラレテ種々案内等ノ御世話モ願ヒ、一泊ヲ願フコトトス。休息ノ後、立山本社ニ
参拝、御開帳ヲ受ク。立山ハ佐伯有若左エ門ノ息有頼公ノ開カルノ所ニシテ其木像ヲ安置ス。
今ハ此處の神ハ手力男神、イザナギ命、二柱ノ神ヲ祀ルト云フ。帰宿後、懇望ニヨリ紀念帳
ニ署名シ、案内佐伯平藏トモ米等ニ就イテ相談ノ上、九時頃床ニ就ク。蚊ノ襲来稍〻盛ナリ。

○神通館発～上滝～芦峅寺着・泉蔵坊泊

午前５時45分に富山市内の宿を出発、上滝で休憩をとり、昼12時半、芦峅寺に到着した。富山市内から芦峅寺雄山神社まで、現在の地図で確認しても富山駅から約25km、徒歩なら約５～６時間はかかる。この当時鉄道は未整備であったが、この後、大正２年（1913）に立山軽便鉄道の滑川－五百石間が開通、さらに10年には立山駅（現在の岩峅寺駅）まで延伸。また、同年には富山県営鉄道の南富山－上滝間が開通し、さらに岩峅寺、横江と延伸している。

一行は上滝で休憩後、芦峅寺までの荷担ぎを依頼した。ところが、大雨で橋が流され、若者はそちらに出払っていて、荷担ぎを引き受ける者がなかなか見つからない。そこへ現れた「一見魁偉悪相ナル」「頗ル危険人物」の「仲吾ノ頭」と交渉することになる。交渉の結果、荷担ぎの代金は、１人なら１円、２人なら１円15銭で決着した。ちなみに、明治41年発行の大井冷光『立山案内』によれば、立山山中で客の道案内と荷担ぎを引き受ける仲語（中語とも。木戸は「仲吾」と記す）を雇った場合、規約により２日間で１人85銭と決まっていたという。41年と44年の物価に大きな変化はなく、上滝～芦峅寺片道と芦峅寺～室堂往復の賃料を比較し、距離・標高差等を勘案すると、引受手が払底した緊急時とはいえ、この賃料は高いと判断されよう。交渉相手は訛りの強い越中方言であろうし、荷担ぎ賃交渉の「談判」は如何なる様相を呈していたか。行程の先を左右しかねない状況下、木戸の胸中は如何ばかり…荷担ぎ確保に安堵したであろうか。

上述の『立山案内』をはじめ、当時の登山案内によれば、富山市内からの一般的な立山登山の道は、上滝まで到達した後、桟橋（新川橋）を渡り岩峅寺村へ行き、そこから常願寺川右岸を進むというものであった。しかし上述の通り、このときは大雨で橋梁が破損していて岩峅寺側へ渡ることができなかったため、一行はしばらく左岸を進み、亀岩あたりを対岸に渡り、芦峅寺に向かったものと推定される。なお、日記中の「川ノ右岸ヲ迂廻シテ」は、右岸を迂廻するために左岸を進んだ、の趣旨と読み取れよう。

芦峅寺での宿泊先佐伯忠胤宅は、近世芦峅寺の宿坊の一つ、泉蔵坊である。日記に「紀念帳ニ署名ス」と記された通り、「泉蔵坊宿泊帖」には、木戸幸一と同行の木戸小六、福田房男の署名がある（「明治四拾四年七月廿一日登山／東京市赤坂區新坂町六拾貳番／侯爵木戸孝正長男／木戸幸一」・「仝／仝／木戸小六」・「明治四十四年廿一日登山／東京小石川區原町七六／福田房男」）。【図６・７参照】。

芦峅寺雄山神社の本殿は廃仏毀釈によって失われた後なので、一行が参拝した「立山本社」は現在の祈願殿と推察される。ここで一行は御開帳を受けたが、それは日記中の「其木像」か否かは判らないが、現在、国指定重要文化財の慈興上人座像を指すのかもしれない。

木戸は「案内佐伯平藏トモ米等ニ就イテ相談ノ上」床につく。木戸は翌日からの山旅に思いを馳せたであろう。日記中にこの後たびたび名前の出てくる佐伯平蔵は、芦峅寺を代表する山案内人で、この時33歳。明治42年に辻本満丸を薬師岳に案内し、これを契機に山案内を本業にしたといわれる。大正10年の立山案内人組合発足時には初代組合長を務め、優秀なガイドを育成した。

５－５　『明治四十四年　當用日記』　7月21日　金曜日　　【図３（見開き右頁）参照】

金曜　　壬辰　　七月二十一日　　天氣　晴　　寒暖　［記載なし］

午前四時十五分起床。大分寐過シタリ。午前五時二十分頃漸ク出発ス。天気晴朗朝
露深キ叢中ノ小径ヲタドル。心モ軽ク身モ軽シ。午前六時半ニ至ツテ約一里
半ナル釣橋ニ達ス。常願寺川ハ濁流逆巻キ物凄キ有様ナルガ、之ハ眞川ノ方ノ崖崩
レニヨルモノニシテ、聖明川ノ水ハ清冷擲スベシ。釣橋ハ荒ノ為メニ破壊セシ故、不得止（ヤムヲエズ）針金ノ上ヲ一人々々
ニ傳リ、約三十分ヲ要シテ漸ク渡リ了リ。其レヨリ材木ヲ作レル小舎ニテ小憩後再ビ出発、之ヨリ愈〻
山路トナル。石ノミ多キ峻坂ヲ上ル。此處ハ材木坂ト云フ由ニテ、之ニハ面白キ傳説アリ。昔シ有賴公ノ開山
セラレシ時ニ其乳母ガ登山セントシテ此處に至リ倒木ヲマタギシニ皆石ト変ゼシト云フ。蓋（ケダ）シ当時ハ女人禁制ナ
リシ故ナリ。八時頃坂上ニ着、小憩。熊野權現窟ニ午前八時四十五分着。スケツチヲナシ等シテ休ム。有賴

公開山ノ際、熊トナリテ登ラレシトキニ憩ハレシ窟ナリト云フ。植物等ヲ手ニ觸ルヽニマカセテ採集ス。面白キ
モノ多シ。十時頃ブナノ森林中ノ水溜ニ憩ヒテ準備ノムスビヲ食ス。聖明瀧ヲ霧ノ間ニ見ル。十二時頃稍〻落葉松等ノマ
バラトナリシ阿弥陀原ニ入リテ休ム。此頃ヨリ天候面白カラズ。霧ノ飛ブコト急ナリ。三時頃ヨリハ
雨降リ出デヽ中々ニ烈シ。四時、雨ヲ突イテ追分ニ着ク。此處ハ室堂ト温泉ヘノ分岐点ナリ。今ハ
只茶屋ノアリシ名残ヲ止ムルニ過ギズ。折リカラ霧ハ四方ノ山ヲ包ミタレバ限リモシラヌ所謂浩々乎
タル原野ニ居ルガ如シ。先ヅ此地ヲ露営地ト定メ、雨中ニ、或リハ木ヲ斬ルアリ、或ハテントヲ張ルアリテ、漸
ク、サヽ、ハンノキ、白樺等ヲ下ニ敷キテ其上ニ呉蓙ヲ敷ク。之ハ晝間ハ日除ケ、雨具トセシモノナリ。斯クシテ
出来上リシ故、草鞋ヲヌギテ横ハル。其心地ノヨキコト金殿玉楼ニ住スルノ比ニアラズ。ブリキノ（石油）鑵ニテ飯モ出来、トンボー（鰯）
ノ乾魚ニ舌鼓ヲ打チシ後、怪談等ヲナシテ愉快ニ過シ、九時頃眠ル。雨ハ山中ノ常トシテ時ニ沛然トシテ来ル。
標高五千二百尺、天幕内ノ温度六十九度。

○芦峅寺・泉蔵坊発～藤橋～追分着・幕営地テント泊

午前４時15分起床、５時20分頃出発、「釣橋」（藤橋）に６時半に到着する。この附近で真川と称名川が合流して常願寺川となる。日記によれば、常願寺川は「濁流逆巻キ物凄キ有様」だが、それは「眞川ノ方ノ崖崩レ」が原因で、大雨でもなお「聖明川ノ水ハ清冷掬スベシ」の状態に澄んでいたことが判る。なお「聖明川」・「聖明瀧」は、現在の表記では「称名川」・「称名滝」となる。日記にはまた、橋が破損していたためやむを得ず「針金ノ上ヲ一人々々」伝って渡らなければならず、渡り終えるのに30分かかったことが記される。この藤橋は、大正期に木橋が架けられるまでは、猿が藤蔓を結んで架けたという伝説のごとく、一人渡るのがやっとの粗末な吊橋だったようだ。渡り終えたところの「材木ヲ作レル小舎」で休憩と記される。当時、称名川左岸（現在の千寿ケ原附近）には製材所があったという。

この日の日記にはスケッチと植物採集のことが記されている。７月25日の日記には写真撮影のことも記されており、一行の登山は、ひたすらに山を登り頂上を目指すようなものではなく、教養趣味を伴って行程をも楽しむものであったことが窺える。

材木坂上に８時頃、「熊野權現窟」（熊王権現か）に８時45分、ブナの森に10時頃、「阿弥陀原」（現在の弥陀ヶ原か）12時頃到着、午後３時頃から雨が降り出し、４時に追分に到着している。芦峅寺から追分まで休憩時間を含めて11時間を要している。当時11時間あれば芦峅寺から室堂に到達できたとされ、かなりゆっくりとした登山といえよう。

雨天の幕営を、木戸は「其心地ノヨキコト金殿玉楼ニ住スルノ比ニアラズ」、「怪談等ヲナシテ愉快ニ過シ」、「雨ハ山中ノ常トシテ時ニ沛然トシテ来ル」と記す。ここには不都合・不愉快な事態への言及は一切なく、慣れているのか、概して不便の多いはずの雨中のテント泊を、木戸は大いに楽しんだようだ。

５－６　『明治四十四年　當用日記』　7月22日　土曜日　　【図３（見開き左頁）参照】

土曜　　癸巳　　七月二十二日　　天氣［記載なし］　　寒暖［記載なし］

午前五時半起床。温度天幕内華氏六十四度。午前七時、雨中ニ天幕ヲタヽミ終リ
テ出発ス。殆ド河原ヲ行クガ如キ石ノ多キ道ナリ。霧晴レズ時々雨降ル。
途中植物採集ヲナシツヽ午前十一時ニハ室堂ニ着ス。雄山ヲ前ニシ浄土山ヲ
右ニス。此附近雪多シ。恰モ天候幾分快復シテ時々日ヲ見ル。雄山、浄土山等晴渡リ
タリ。室堂ニ入リ、爐ノ一隅ノ一カヽヘモアル如キ四本ノ柱ノ間ニムシロヲ立テヽ一劃ヲツクリ
テ座敷トシ、下ニハ呉蓙ヲ敷ク。休憩晝食ノ後、神官ノ山開キニ上ルト云フニ従ヒテ本社
ノアル雄山ニ登ル。諸々ニ雪多シ。本社迄ニハ身ヲ浄メ給フ神ノ社アリ。一ノ越ヨリ五ノ越迄ノ
小祠アリテ後ニ本社アリ。道嶮ニシテ磊々タル石ノミナリ。頂上ニ至リ、本社ニハ石ヲ積メアル（
耐風ノ為メ）ヲ取リノゾク迄待ツ。丁度、後立山連峰ノ方面晴レテ雄姿ヲ雲間ニ現ハス。白馬、

針木峠、黒部川等、指スベク壯觀ナリ。約四十分ノ後準備出来シ故、神社前白洲ニ座シテ
開扉式ニ列ス。神官ノ祝詞、神社ノ沿革ノ話アリ、終リニ寄附金ノコトヲ神社ノ床上ヨリ
白洲ニ座ラセテ置イテノ御説法ニハ聊(イササ)カ恐縮シタ。六時半頃下山ス。途中雲間
ニ信州飛驒ノ境ナル槍ヶ岳ヲ望ム。其形眞ニ其名ニソムカズ。帰途ハ雪ノ上
ニ呉蓙ヲ引キテ氷リ滑等シテ下山ス。八時半頃眠ル。

○追分幕営地発～室堂着／室堂発～雄山神社峰本社往復～室堂泊

『立山案内』など当時の登山案内書に記されている通り、追分から登山道は３方向に分かれる。室堂に向かって右の道は、立山温泉へ通じ、中央は室堂へ直行（『立山案内』にいう「姥懐なる石径」）、左は二ノ谷や一ノ谷、獅子ヶ鼻などを経由して室堂へ通じる険しい登山道である。木戸一行は、午前７時に出発し、まさに中央の「殆ド河原ヲ行クガ如キ石ノ多キ道」を進み、午前11時に室堂に到着した。日記には「神官ノ山開キニ上ルト云フニ従ヒテ本社ノアル雄山ニ登ル」と記される。この年は、７月25日が立山の山開きで、それに先立ち23日には奉幣使として本間富山県事務官が出発した、と当時の新聞『富山日報』などが伝えている。日記に見える神官は、山開きの準備に登ったものであろう。

室堂から一ノ越に向かう途中の「身ヲ浄メ給フ神ノ社」は祓堂であろう。また、「本社ニハ石ヲ積メアル（耐風ノ為メ）ヲ取リノゾク迄待ツ」と記されるのは、冬の間、峰本社正面三間に大きな石を充填し、風雪に備えていた様子を描写したものと思われる。厳しい冬に備えるため峰本社では冬支度に石を充填していたことがわかる。その石を取り除く間に晴れ間が現れ、木戸一行は初めて山上の大観を目の当たりにした。「丁度、後立山連峰ノ方面晴レテ雄姿ヲ雲間ニ現ハス。白馬、針木峠、黒部川等、指スベク壯觀ナリ」の文言には、これを堪能する木戸の感慨が見て取れる。

そしてこのあとに、興味深い記述が続く。「神社前白洲ニ座シテ開扉式ニ列ス。神官ノ祝詞、神社ノ沿革ノ話アリ、終リニ寄附金ノコトヲ神社ノ床上ヨリ白洲ニ座ラセテ置イテノ御説法ニハ聊カ恐縮シタ」。文末の「聊カ恐縮シタ」という表現は、若干の驚きと皮肉を含んでいるように見える。この出来事は、華族の子弟達にとっては、いささか面食らう事態であったことだろう。

５－７　『明治四十四年　當用日記』　7月23日　日曜日　　【図４（見開き右頁）参照】

日曜　　甲午　　七月二十三日　　天氣　雨　寒暖　［記載なし］

午前五時半起床。相(ママ)憎雨ナリ。出発カ中止カ決セズ九時頃漸ク準備ナル。吾等ハ、先ヅ平蔵
ヲ伴ヒテ地獄谷ヲ見物ス。火山ニハ何處ニモアレド此處ノハ中々壯觀ナリ。試ニ石ヲ投ズレ
バ忽チ跳上グ。室堂ニ帰リタル頃ニハ風サヘ少シ加リ、雄山ノ辺リハ雲霧一去一来暫クモ低(ママ)止セズ
險悪ノ徴アリ。人夫モ躊躇ノ様ナリシガ意ヲ決シテ出発ス。十時ナリ。一ノ越ヲ越、ソレヨリハ道ナキ所
ヲ雄山沢ニ向ヒテ眞直ニ下ル。雪多ク渡ルコト五六囲、皆厚ハ一間ニモ餘リ、下ハ谷川ナリ。膝位迄
入リテ徒渉スルコト数囲、フト雪ノ一角ヲ廻レバ遙カ下ニ天幕ヲ張レルモノアリ。如斯(カクノゴト)キ人里離レシ所
ニハ心得ガタキ所故、不審ニ思ヒテ至リシニ、三枝威之介、加藤氏ノ一行ナリ。前日の礼ヲ述べ、暫時
小憩、用意ノムスビヲ食シテ談話ヲ交換シテ一時半頃別レテ出発ス。其レヨリ直チニ右折シテ
無名沢ヲ上ルコト小時、雜木林ノ欝茂タル中ニ入ル。天候囲復セズ白樺等ノ所
セマキ迄ハビコレル中ヲ行ク。漸ク頂上ニ達セシガ再ビ同様ノ塲所ヲ下ルニ、下リハ上リヨリハ
一層困難ナリ。中之沢（谷）ニ下リシ頃、夕立ノ沛然トシテ至リ、一同濡鼠ノ如クニナレリ。河原ヲ
溯ルコト数町、カリヤス峠ノ旧道ニ出デ何ナク越ス。將ニ失ハレントスル一小径に過ギザレド河原
ノミヲ過ギ来タリシ身ニハ都大路ヲ行クニモマシテ心嬉(タ)ノシ。午後六時十分頃、漸ク平蔵ト共ニ
遠山品右エ門氏ノ所謂(イハユル)平ノ小屋ニ着ス。他ノ連中ハ道ヲ誤リテ木挽小舎ノ方ニ至リシ故、半
頃ニ漸ク着シタリ。爐ヲ囲ミテ四方山ノ話ヲナシテ十時頃漸ク眠リニ就ク。

○室堂～地獄谷往復～室堂発～一ノ越～御山谷～イタヤ峠～中ノ谷～刈安峠～平ノ小屋着・泊

この日は生憎の雨だったが、一行は９時頃に平蔵の案内で地獄谷を見物、その後、天気を心配しつつ10時に室堂を出発し、一ノ越へと向かった。一ノ越からは雄山沢（現在の御山谷）を真っ直ぐ下っている。その時、はるか下に天幕を発見した。日記には、天幕で野営していたのは、「三枝威之介、加藤氏ノ一行ナリ」と記されている。なお、三枝威之介は、日本近代登山史上の重要人物である。この時の立山登山については、明治44年（1911）11月発行の「山岳」第６年第３号の会員登山報に以下のように記載されている。

> ○三枝威之介、加賀正太郎氏兩氏は七月中旬信州大町より針木峠に登り針木岳頂を極め平の小舎に下り御山澤より一ノ越を經て立山室堂に至り雄山別山に登り續いて劔ヶ岳を極めんとせられしも天候の不良は素志を達せしめず三枝氏は室堂より富山を經て歸京せらる…

「泉蔵坊宿泊帖」には、木戸一行の名前に続いて「明治四十四年七月廿六日下山／日本山岳會幹事／東京市牛込區早稲田大学前／三枝威之介」とあり、三枝が室堂から富山を経て帰京する際に泉蔵坊に宿泊したと判る。

三枝と別れた木戸一行は、「其レヨリ直チニ右折シテ無名沢ヲ上」り、「漸ク頂上ニ達セシガ再ビ同様ノ塲所ヲ下ル」と、峠を越えたことを記す。この峠はイタヤ峠といい、冠松次郎『立山群峯』付録「立山附近略圖」などにその名が見える。

木戸一行は、夕立で濡れ鼠のようになりながらも、「カリヤス峠ノ旧道」を通り、平の小屋へ向かった。木戸幸一は佐伯平蔵とともに午後６時10分頃平ノ小屋に到着。他の２人は道を間違え遅れたが、６時30分に到着している。この旧道は、いわゆる信越連帯新道（立山新道、越信連帯新道、針ノ木新道とも称された）である。明治初期に開削された､原村（現富山市）－立山温泉－ザラ峠－針ノ木峠－野口村（現大町市）を結ぶ有料道路で、わずか数年で廃道同然となり営業を終了した。広瀬誠『立山のいぶき』によれば、明治15年に廃道になったという。26年にはウォルター・ウェストンらが大町からこの旧道をたどり、立山登山を行うなど、旧道の一部は廃道後も利用された。

この日一行は、「遠山品右エ門氏ノ所謂平ノ小屋」に泊まった。遠山は釣師を生業とした人物で、この時60歳。明治の初め頃に釣りと猟のために小屋を建て、その後登山者を泊めたり、食料を販売したり、道案内をするなどしていた。登山者には未知の黒部川上流域に精通して多くの登山者に影響を与えた。明治11年にはイギリスの外交官アーネスト･サトウが、42年には日本山岳会の辻本満丸がこの小屋に宿泊している。

５－８　『明治四十四年　當用日記』　7月24日　月曜日　　【図４（見開き左頁）参照】

月曜　　乙未　　七月二十四日　　天氣　晴　　寒暖　［記載なし］

午前四時半目覚ム。今日ハ漸ク天気快復ニテ青空ヲ見セ心地ヨシ。顔ハ黒部川ニ出デヽ
洗フ。昨日ハ夕暮ナリシ故、充分見物セザリシガ、水ハ清冷ナルコト如何ニモ日本アルプスノ精ヲ拔キテ流
ルヽカノ心地ス。流レ中々早（ハヤ）ク河幅廣ケレバ徒渉ハ到底不可能ナリ。幸ニ、品右エ門氏手製ノ籠
ノ渡アリシヲ以テ、其破損セル綱等ヲ持参ノ綱ニ代ヘテ渡ルコトトシ、平藏、好藏、之ニ従事
シ、春藏ハ握飯ヲ作ル。九時半、対岸ニ渡リ、荷物ノ整理等万端準備整ヒテ針木沢ニ向ヒ
シハ十時ナリキ。品右エ門氏ニハ此處ニテ別ル。針木沢ハ、沢トハ云ヒナガラ谿流ノ幅モ廣ク且ツ急流ナレバ
徒渉中々困難ニテ膝腰位迄ツカリテ渡ルコト十数回ニシテ、晝頃ニハ少シハ河モ狹クナリ、時ニ
ハ河ヲ離レテ上ニ旧道ノ遺跡ヲタドルコトモアリ。斯クテ幾多ノ困難ノ後、愈〻針木峠ニ入ル沢ノ
分岐点ニ至ル。此處ニハ木ノ皮ヲ剥ギテ針木峠ノ道ト墨痕鮮ニ記シアリ。日本山岳会員トナセル所、多
分三枝氏一行ノ書カレシモノナラント心ノ中ニ感謝ス。午後六時、急坂ヲ攀ジテ頂上ニ着ス。北側ハ一面ノ
雪ニテ急峻ナリ。祖父岳等前面ニソビエテ絶景ナリ。早速天幕ヲ張ル。非常ニ寒冷ニシテ
作業中モガタガタフルエル程ナリ。漸ク準備整ヒテ天幕内ニ横ハリシヲ、水ハナケレバ雪ヲ溶カ
スベキ石油鑵ニ穴ノアキシトカニテ水モ得ラレズ、飯モ出来ズト云フ始末。人夫供ハコーナルト不

平ヲ云ヒテ手ガツケラレズ大ニ面倒ナリシガ、携帯ノ小鍋ニテ半ニヘ飯ヲ作リテ、ドー
ニカ腹ヲコシラレ(ママ)ヘ、九時頃眠ル。寒シ。

○平ノ小屋発～黒部川横断～針ノ木沢～針ノ木峠着・幕営地テント泊

この朝、漸く天候が快復して青空を望んだ。「青空ヲ見セ心地ヨシ。顔ハ黒部川ニ出デヽ洗フ」と書く木戸は、ここにて漸く愁眉を開き、爽快の感を満喫したのであろう。

この日の記述に初めて、平蔵以外の案内人に、「春藏」と「好藏」が登場する。春蔵は平蔵の弟で、この時28歳。大正２年（1913）、木暮理太郎、田部重治、中村清太郎を宇治長次郎と剱岳別山尾根に案内するなど、芦峅寺を代表する山案内人である。好蔵については資料がなく一切が不明である。

「針木峠ニ入ル沢ノ分岐点」では、「針木峠ノ道」と墨書された鮮やかな文字を木戸は見ている。信州大町から針ノ木峠を越えてきた三枝一行が書いたものと思い、「心ノ中ニ感謝ス。」と日記に記している。峠の頂上には午後６時に到着し、天幕を張った。日記に「北側ハ一面ノ雪キニテ急峻ナリ」とあるが、日本三大雪渓の一つ針ノ木大雪渓であろう。また、「祖父岳」は爺ヶ岳と推察される。

幸先の良かったこの日だが、幕営地の夕餉支度で悶着が起きた。峠に雪はあるが水はない。ところが、雪を溶かす「石油鑵」に穴が開いて水は得られず、「飯モ出来ズト云フ始末。人夫供ハコーナルト不平ヲ云ヒテ手ガツケラレズ大ニ面倒ナリシ」という事態。携行した小鍋で半煮えの飯を炊き、木戸はこの難局を凌ぐ。山案内人と荷担ぎへの食事の充当は、彼らには賃金に準じて重要で、一つ間違えると大ごとになりかねない状況だったといえる。小鍋を自ら携行していたのは何らかの経験によるものか、木戸は小鍋一つで場を収めたわけである。

５－９　『明治四十四年　當用日記』　７月25日　火曜日　　【図５（見開き右頁）参照】

火曜　　丙申　　七月二十五日　　天氣　晴　　寒暖　［記載なし］

午前四時半目睟ム。一天晴渡リテ一点ノ雲モナシ。直チニ峠ノ上ニ登ル。峯々谷々皆曇ヲ收メテ陽陰
劃然ト些ノ不明瞭ナル所ナク、日本アルプスノ全景、面前ニ展開セリ。雄大莊嚴、述ブルニ語ナシ。
思ハズ快哉ヲ叫ブ。槍ヶ岳ハ著シク其特長ヲアラハシテ一目ニソレト著ク、遠ク白峰山脈ト甲斐駒ヶ岳ノ山脈
トノ中間漠々タル雲間ニ冨士ハ宛然チヨコヲ俯(ママ)セタル如クニ聳ヘタリ。何處ヨリ見テモ富士ハ圓滿ナル秀嶺ナリ。
半煑飯ニテ朝食ヲ済シ、寫眞ノ撮影等シテ天幕ヲタヽミ、七時カンヂキヲ足底ニ附シテ下山ノ途ニ就ク。雪谿
甚ダ急峻ナリ。全ク雪ノ盡クル所迄ハ約一里約一時間ヲ要シタリ。ソレヨリ籠川谷ヲ、或ハ左岸ヲ或右岸ヲ数回渡渉シテ
下ル。後ヲ振リ返ヘレバ既ニ針木峠ハ背後ニ屏風ノ如クソビエ、今迄其頂上ニアリシコトノ寧ロ不思議ナルガ如シ。益ゝ下ルニ
ツレ、気候ハ暑気ヲ加フ。十二時ニ至リ山ノ神ノ手前ニテ晝食ス。此辺ヨリ下ハ大分切リ開カレタル所モアリ、道ラシキモノヲ
認ム。途上一学生ノ立山指シテ行クニ會ス。何等縁モユカリモナキモノナレド吾等ノ通路ヲ行クカト思ヘバ何トナク他人ノ如キ感
ナシ。彼方モ亦然カ思ヒシカ、無言ノ儘一礼シテ別ル。三時頃野口村ニ着シ、村社ニテ休息シ、四時半頃ニハ大町ニ入
ル。甚ダ暑シ。先ヅ氷屋ニ入リテ氷ヲ飲ム。今朝迄ハ雪ハ見飽キテ口ニダニセザリシモノヲ、今トナリテハ何トナク口惜
ク思フモ可笑シ。対山館ニ入ル。草鞋ヲヌギ居リシニ、二階ヨリ降リ来ル人アリ。見レバ黒木清君ナリ。互ニ
久濶ヲ叙シ、奇遇ヲ喜ブ。二囲(ママ)ニハ、三次君、高橋是孝君、高木八尺君モアリ。四君ハ白馬岳ノ帰途、今
日二時頃着、一泊セラルヽナリト。互ニ往復シテ御互ノ経驗談等シテ、愉快ニ暮シタリ。十時頃
寐ル。

○針ノ木峠幕営地発～針ノ木雪渓～籠川谷～山ノ神～野口村～大町対山館着・泊

この日は、行程中初めて「一点ノ雲モナシ」の大快晴であった。木戸は午前４時半に目覚め、「直チニ峠ノ上ニ登」って大パノラマを眼前に堪能する。「雄大莊嚴、述ブルニ語ナシ。思ハズ快哉ヲ叫ブ」と記す木戸は、この山旅最大の感動に浸ったであろう。そして遙かに富士を望み、「何處ヨリ見テモ富士ハ圓滿ナル

秀嶺ナリ」と称える。木戸は日本人のアイデンティティを意識したのかもしれない。

木戸はこの日、針ノ木峠から槍ヶ岳や「白峰山脈ト甲斐駒ヶ岳ノ山脈」、その間に「冨士」を、前日には、爺ヶ岳を確認している。22日には立山雄山山頂から「白馬、針木峠」を遠望する記述もある。木戸一行は、一部に誤認もあるようだが、山座を特定できる知識をある程度持っていたことが判る。一目瞭然の特徴的山稜・山頂は別として、山座同定は初心者にとっては必ずしも容易でないことから、一行の中には、以前から北アルプスに登り、幾度か山岳展望を経験した者がいた、と見るのが妥当であろう。

天幕をたたみ午前７時に出発、12時に「山ノ神」手前で昼食、午後３時野口村、午後４時半頃大町に入った。途中立山を目指す単独行かと思われる見知らぬ学生とすれ違う。そして「吾等ノ通路ヲ行クカト思ヘバ何トナク他人ノ如キ感ナシ。彼方モ亦然カ思ヒシカ、無言ノ儘一礼シテ別ル」と交感の情を日記に綴った。

大町での宿泊先・対山館は百瀬家が経営していた旅館で、明治30年代後半から登山者の定宿として有名であった。大町を訪れた多くの軍人や外国人、学生、文化人らの登山を支えた旅館であり、大正から昭和初期には山岳愛好家の著名人が集うサロンとなるが、44年当時は、百瀬金吾が経営していた。なお、息子の百瀬慎太郎は、後に、日本初の登山案内者組合「大町登山案内者組合」を結成するが（大正６年（1917））、この時はまだ18歳であった。

木戸一行は、対山館で黒木三次、黒木清、高橋是孝、高木八尺の４名と偶然にも同宿となり、お互いの登山の話をしながら楽しく過ごした。高橋是孝とは奇しくも立山登山行出発日に面会しているが、日記に「奇遇ヲ喜ブ」とあるように、待ち合わせていたわけではないようだ。

黒木一行の登山行については、前掲の「山岳」第６年第３号、会員登山報に次の記載が見える。

○黒木三次氏は同行數氏と白馬岳へ登り、次で中房温泉より燕岳、大天井岳、常念岳に登り二股に下り、赤澤より槍ヶ岳に登山、上高地に出で、尚ほ八ヶ岳に登山せられたり。

日時に言及がなく確証はないが、登山報の「黒木三次氏」と「同行數氏」は、「白馬岳ノ帰途」対山館に宿泊の上記４名で、この後、中房温泉から再び入山して諸峰を目指す途上なのは、ほぼ間違いないであろう。

黒木三次は、陸軍大将黒木為禎伯爵の長男で、のちに伯爵、貴族院議員となる。当時は東京帝大法科大学の学生で、同年９月に日本山岳会に入会している。黒木清は、三次の弟で、大正４年に黒田清仲（内閣総理大臣黒田清隆の子）の養子となり、伯爵、貴族院議員となる。当時18歳であった。日本山岳会の会員名簿には同年９月入会の黒田清の名が見えるが同一人物かは不明である。高橋是孝については前述の通り。高木八尺は、一高から東京帝大法科大学に進み、のちに東京帝大教授、貴族院議員となる。彼らはいずれも、夏休み及び９月の大学入学前の余暇を利用し、登山したものと考えられる。

５－10　『明治四十四年　當用日記』　7月26日　水曜日　　【図５（見開き左頁）参照】

水曜　丁酉　七月二十六日　天氣　晴　寒暖［記載なし］

［本文記述欄空白］

○前日の対山館泊以降の行程は不明

７月26日は、天気欄に「晴」とのみ記される以外は空白である。

以上が、木戸幸一日記に見る明治44年（1911）７月17日から７月26日までの立山登山の記録である。

むすび

芦峅寺旧宿坊家、泉蔵坊の宿帳「泉蔵坊宿泊帖」には、明治17年（1884）８月16日の清国北京公使館の宍戸璣（宿泊帖では穴戸璣）から昭和９年（1934）７月11日の中村清太郎まで、50年にわたって宿泊者の名前が記されている。年代順に掲げると、李家隆介（富山県知事）、辻本満丸、吉田孫四郎、大町桂月、生田信、

河合良成、匹田鋭吉（富山日報主筆）、林並木、ウエストン、石崎光瑤、スマイス、ドント、近藤茂吉など、文人墨客・教育者・研究者、また外国人と、様々な人々の名が記されている。ただ、一部のいわゆる著名な登山家を除いて、彼らの立山登山の内容が知られる資料の類は確認されていない。そのようななかで木戸の立山登山の日記記録は意味を持つ。

木戸の名前は、日本山岳会の会員名簿にも、「山岳」の記事の執筆者一覧にも見えない。熱心な登山愛好家だったとは必ずしも言えないだろう。近代登山を受容した上流社会・知識階級に属する当時の学生の間に行われていた登山を、余暇活動の一つとして木戸も実践したのではないだろうか。

この、木戸による立山登山の記録が日記（旧侯爵木戸家資料「明治四十四年　當用日記」）に確認されたことにより、立山・黒部領域の近現代登山史に新たな資料が一つ加わったことになる。

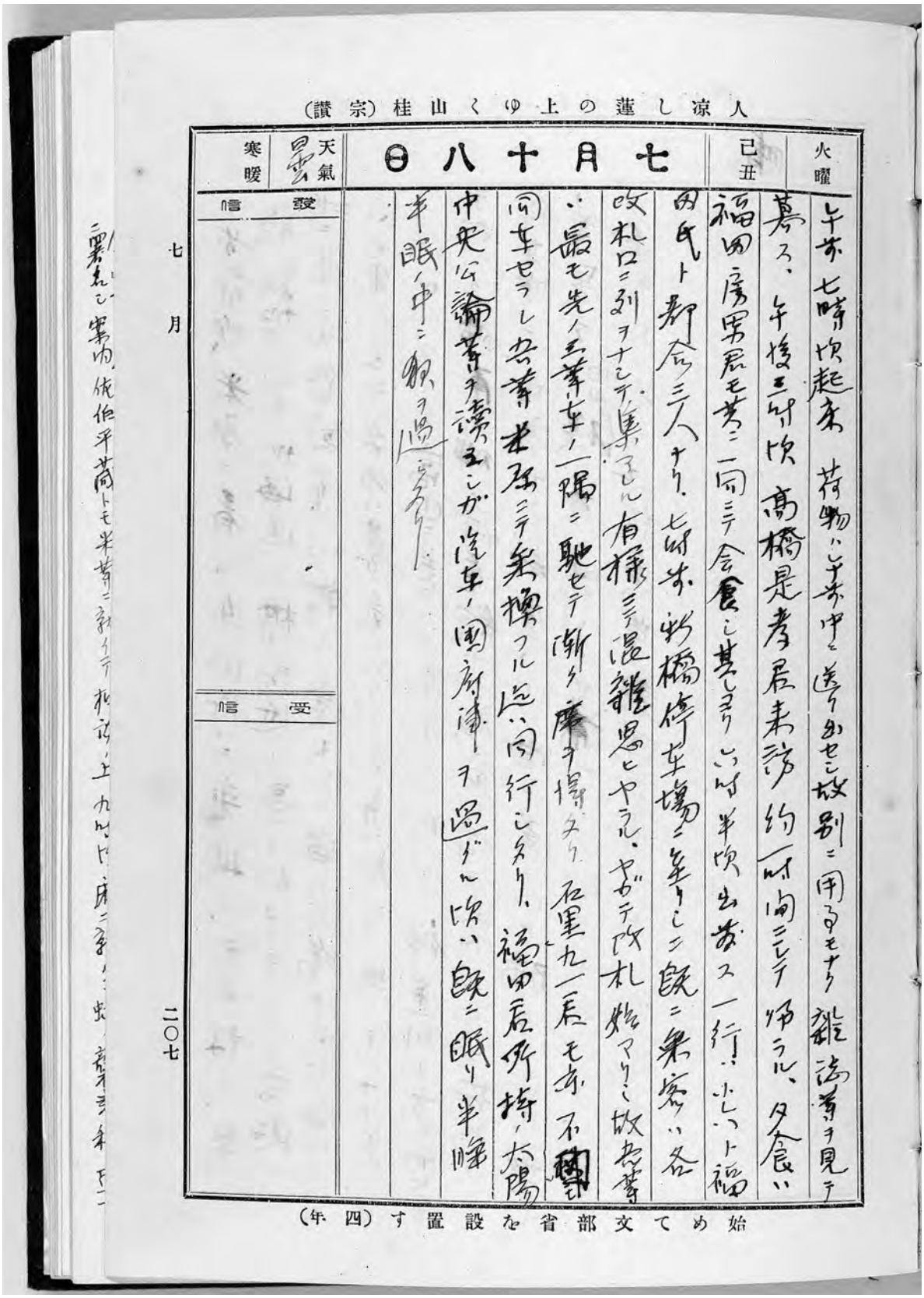
明治末のこの時代、本格的登山家ではない者が残した、立山登山の詳細な記録は類例が少ない。当該日記には、明治末期の立山の登山状況、鉄道などの交通事情、治水状況、さらには当時の富山市街地の様子などを窺い知る上で有用な情報が記されており、明治末期の富山の地理・社会状況の理解に新たな手掛かりを与えるとになり、特に、「大正登山ブーム」前夜の登山をめぐる状況の理解に寄与するものともなるであろう。また、これらの記述は日記を記した者の興味･関心、感銘、印象など、旅行者の眼差しを示すものでもあり、木戸の心情を読み解く手掛かりとなろう。

本稿では、木戸幸一の立山登山の記録について述べてきた。今回は、日記記述の事実関係を把握し、史実と照らし合わせながら、内容を整理することを主体としたが、今後、より多くの関連資料を参照しながら、木戸幸一という若者を立山登山に向かわせたものは何だったのか、さらに深く読み解き、より深く分析したいと考えている。

［図について］

「国立歴史民俗博物館所蔵　旧侯爵木戸家資料　明治四十四年　當用日記」の図１～５は、次頁以降に各図を見開き２頁にわたって掲載する。

7月18日



人涼し蓮の上ゆく山桂（宗讃）

火曜	己丑	七月十八日	天氣 晴	寒暖

午前七時頃起床　荷物ハ午前中ニ送リ出セシ故別ニ用ヲモナク雑誌等ヲ見テ暮ス、午後三時頃高橋是孝君来訪約一時間ニテ帰ラル、夕食ハ福田房男君モ共ニ一同ニテ会食シ其ヨリ六時半頃出発ス一行ハ少シト福田氏ト都合三人ナリ、七時半新橋停車場ニ着シニ既ニ乗客ハ各改札口ニ列ヲナシテ集ヒ有様ニテ混雑思ヒヤラル、ヤガテ改札始マリシ故乗客ハ最モ先ノ三等車ノ一隅ニ馳セテ漸ク席ヲ得タリ、石黒九一氏モ来ル不図同車セラレ共等米子ニテ乗換フル迄同行シタリ、福田君所持ノ太陽中央公論等ヲ読ミシガ後ノ国府津ヲ過ダン頃ハ既ニ眠リ半睡半眠ノ中ニ新ヲ過ヒタリ

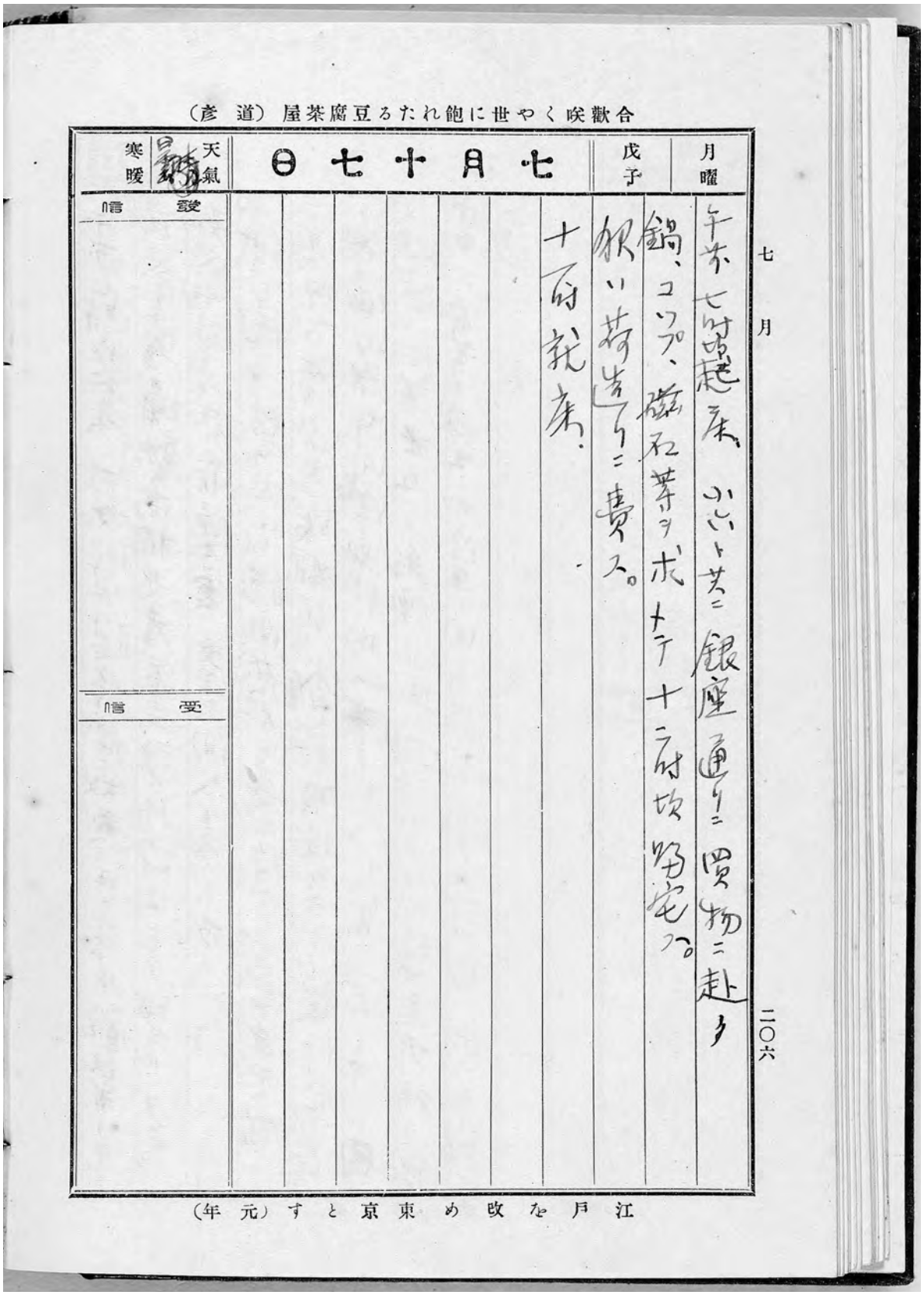
發信	受信

七月　二〇七

始めて文部省を設置す（四年）

図1　旧侯爵木戸家資料　明治四十四年　當用日記（国立歴史民俗博物館所蔵）

7月17日



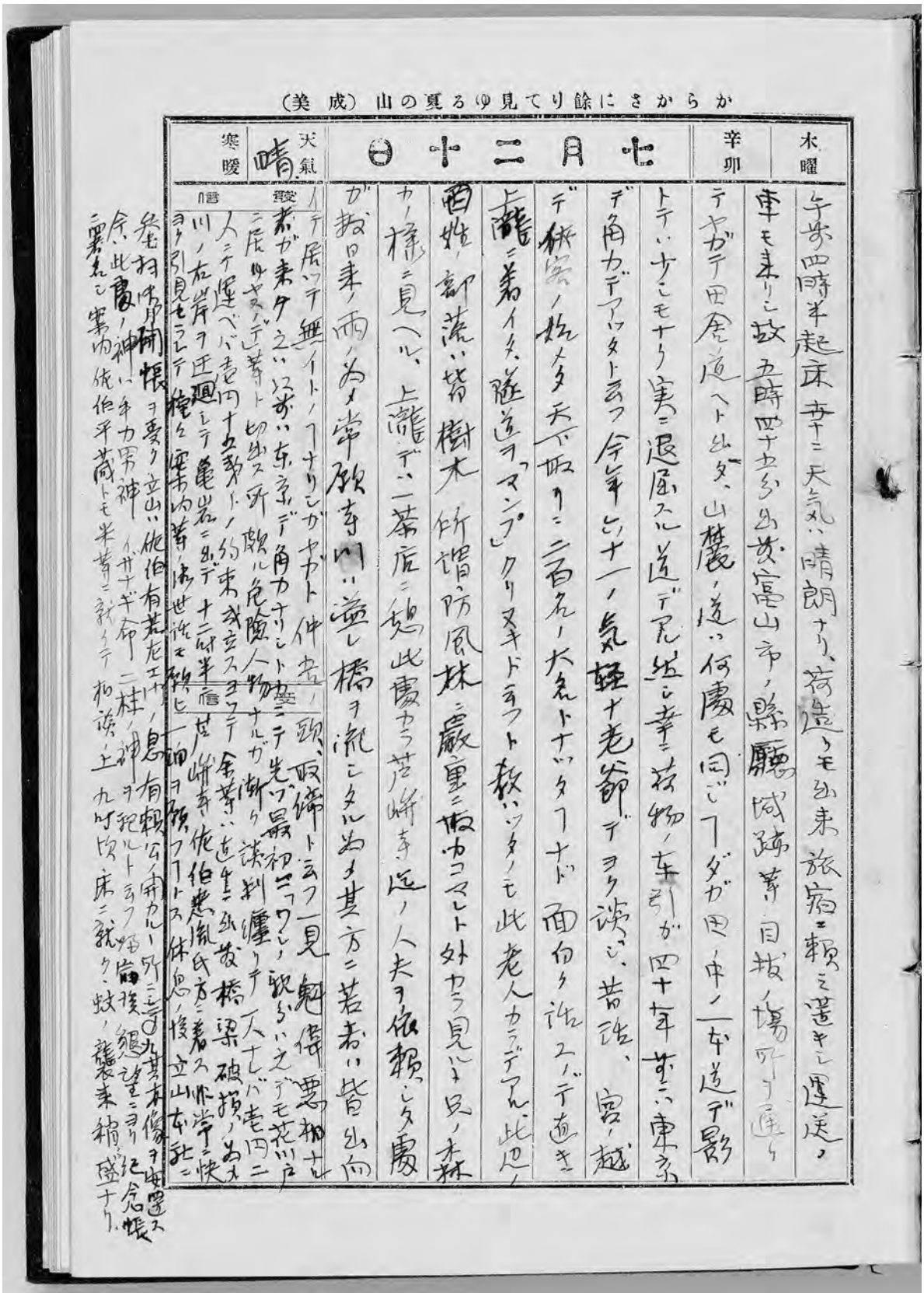
（道彦）屋茶腐豆るたれ飽に世やく咲歡合

月曜	戊子	七月十七日						天氣 寒暖	發信	受信
午前七時起床、小川ト共ニ銀座通リニ買物ニ赴ク	鍋、コップ、磁石等ヲ求メテ十二時帰宅ス。	午後十時就床。								

七月　二〇六

（年元）すと京東め改を戸江

7月20日



かからさに餘りて見ゆる夏の山（成美）

水曜	辛卯	七月二十日	天氣 晴	寒暖

午前四時半起床　本日ニ天気ハ晴朗ナリ、荷造ヲモ出来旅宿ニ頼ミ置キシ運送ノ事モ来リシ故　五時四十五分出発富山市ノ縣廳城跡等目抜ノ場所ヲ運ラ
テヤガテ田舎道ヘト出タ、山麓ノ道ハ何處モ同ジ丁ダガ田中ノ一本道デ影
トテハ少シモナク実ニ退屈スル道デアル近ニ幸ニ荷物ノ車引ガ四十年ボニ東京
デ角カデアッタト云フ今年七十一ノ気軽ナ老爺デヨク談シ、昔話、宮ノ越
デ休憩ノ為メ天下取リニ百名ノ大名トナッタナド面白ク話スバテ直キ
上麓ニ着イタ、隧道ヲ「マンプ」クリヌキドヲフト教ッタノモ此老人カラデアル此辺ノ
西姓ノ部落ハ皆樹木ノ所謂防風林ニ厳重ニ囲ムコマレト外カラ見ルヨリ見ノ森林
カノ様ニ見ヘル、上麓デハ一茶庵ニ憩ヒ此處カラ芦峰寺迄ノ人夫ヲ依頼シタ處
ガ数日来ノ雨ノ為メ常願寺川ハ逆レ橋ヲ流シタル為メ其方ニ若者ハ皆出向
イテ居ッテ無イトノコトナリシガヤガト仲者ノ頭、取締ト云フ一見魁偉恐ハナル
者ガ来タ之ハ以ッテ東京デ角カナリシトカ云ヒテ先ヅ最初ニコワレノ恐ラハ之デモ花川戸
ニ居ルヤウデ芦峰ト切出ス所ハ危険人物ナルガ漸ク談判纏リテ人ナレバ老円ニ
人ニテ運ベバ老円十五銭ト約束成立スヨフテ金芦ハ迄生ニ出発橋梁破損ノ為メ
川ノ左岸ヲ迂廻シテ亀岩ニ出デ十二時半信ノ峠ヲ伝ヒ佐伯恵治氏方ニ着ス非常ニ快
ヨク引見セラレテ種々案内等ハ世話ヲ頼ヒ一泊ヲ願フコトス休息ノ後立山本社ニ
発ス其内佐伯有義氏ハ用ハ用カルノ所ニ三〇九其本像ヲ安置ス
余此處ノ神ハ手力男神ノ外ナギ命ニ桂ノ神ヲ祀ルトヨフ畑地接続ノ感望ニヨリ記念帳
ニ署名ニ案内佐伯平蔵トモ米芋ニ就イテ相談ノ上九時頃床ニ就ク、蚊ノ襲来稍盛ナリ、

図２　旧侯爵木戸家資料　明治四十四年　當用日記（国立歴史民俗博物館所蔵）

7月19日

犬蓼や汗馬を洗ふ脊戸の雨（宗外）

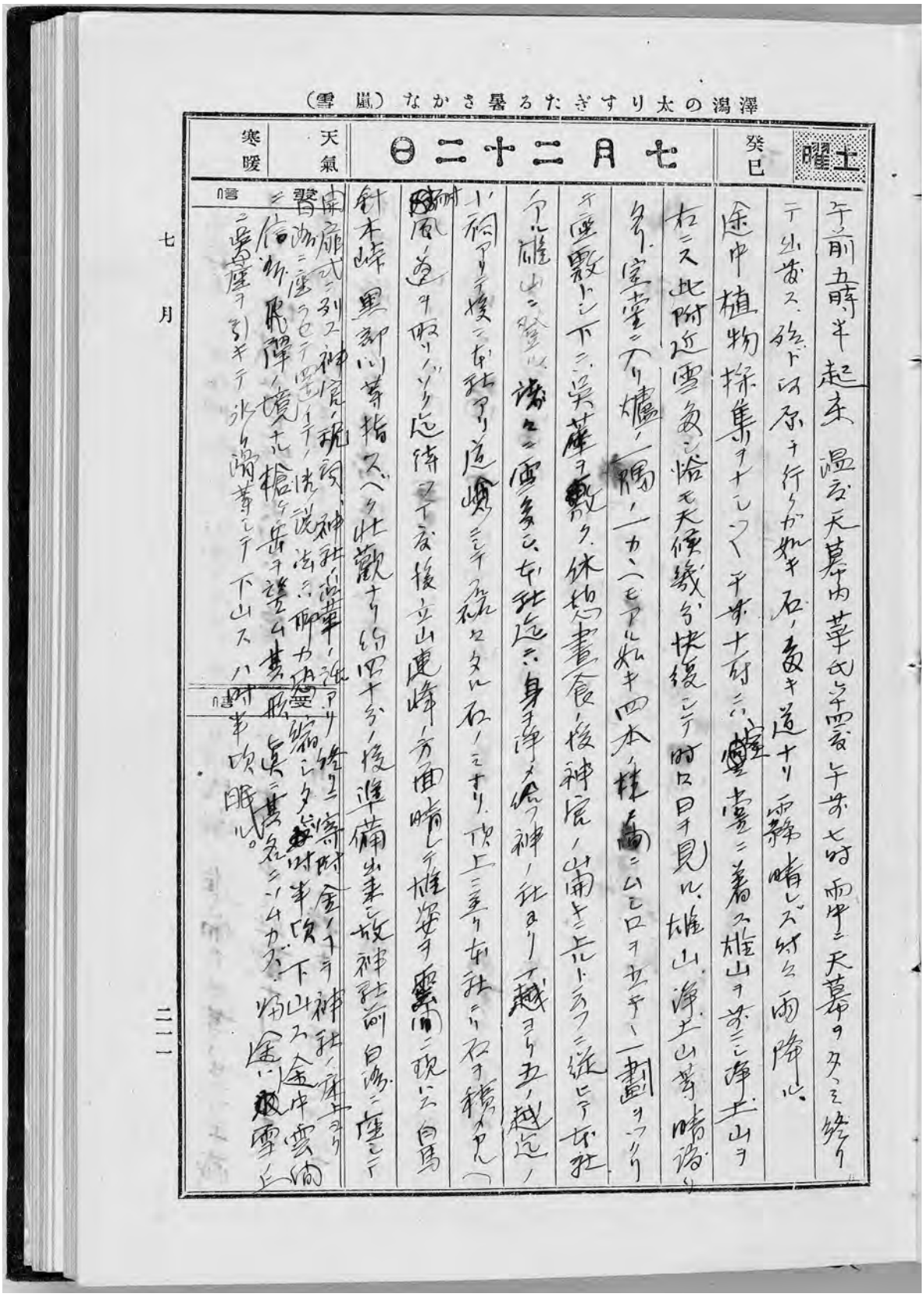
水曜	庚寅	七月十九日	天氣 晴	寒暖

七月　二〇八

午前七時頃、米原ニ着、下車、泊行ニ乗換フ、天気好シ、舞鶴敦賀辺リ北海道ノ樺附近ノ景ニ似タルモノアリ、雪越ノ地ニ来リシガ如キ感アリ、小舞子ノ濱ヨリ海水浴場ヲ過ギ海水浴ニ、二の宮ナランモ名高イ甚ダ気ニ入ラズ名高イ却ツテ無ツモガナト思フ、午後四時半過富山ニ着、下車直チニ町ヲ神通川ノ方ニ向ヒテ行ク、神通川畔ニ神通館ナル旅宿ヲ得テ宿シ夫ガ荷物ヲ停車場ヨリ取寄セシム、部屋ハ川ニ面シ遠ク川ヲ隔テ、立山聖峯ヲ眺ル、福田屋、雲ノ晴レハ清中三角ニ聳ル不如山ナリ、夕食後四ツヲ散歩ス、乾果草鞋等ヲ買ヒ求ム、九時就床、

韓國新帝の即位（四十四年）

7月22日



澤潟の太りすぎたる暑さかな（嵐雪）

土曜　癸巳　七月二十二日　天氣　寒暖

午前五時半起床　温度天幕内華氏二十四度午前七時雨中ニ天幕ヲ久ヶ敷終リテ出發ス　殆ド以前ヲ行クガ如キ石ノ多キ道ナリ雨降リ晴レズ終ニ雨降リ

途中植物採集ヲナシツヽ午前十時ニ室堂ニ着ス雄山ヲ前ニ淨土山ヲ右ニ又此附近雪多シ恰モ天候幾分快復シテ時ニ日ヲ見ル雄山淨土山等晴渡リ室堂ニ入リ爐ノ傍ニ一カヽヘアル如キ四本ノ柱間ニムシロヲ立テヽ一劃ヲツクリテ座敷トシ下ニ笑薩ヲ敷ク休憩書食後神宮ノ前キ点トスル三社ニ詣ヒテ社ノ前ニ登ル

遂々雪多シ社迄ニ身ヲ淨メ給フ神ノ社ヨリ一越ヨリ五ノ越迄ノ間アリテ後ニ社アリ迄嶮ニシテ殆ンダル石ノミナリ頂上ニ至リ社ヲ石ヲ積ミ（附）風ノ為ヲ防リソノ迄待ツテ後立山連峰ノ方面晴シテ雄姿ヲ露ハス現ハス白馬針木峠黒部川等指スベキ壯觀ナリ約四十分ノ後準備出来ニ成神社前白湯ニ座シテ

神宮式ニ列ス神宮ノ現況　神社ノ沿革ノ概アリ　絵ヨリ寄附金ノ下ニ神社ノ庫ヨリ

醫務ニ座ヲセテ四五ヶ所ノ治療ヲ施シ所カ功ヲ奏シ夕刻ニ半頃下山ス途中雲霧

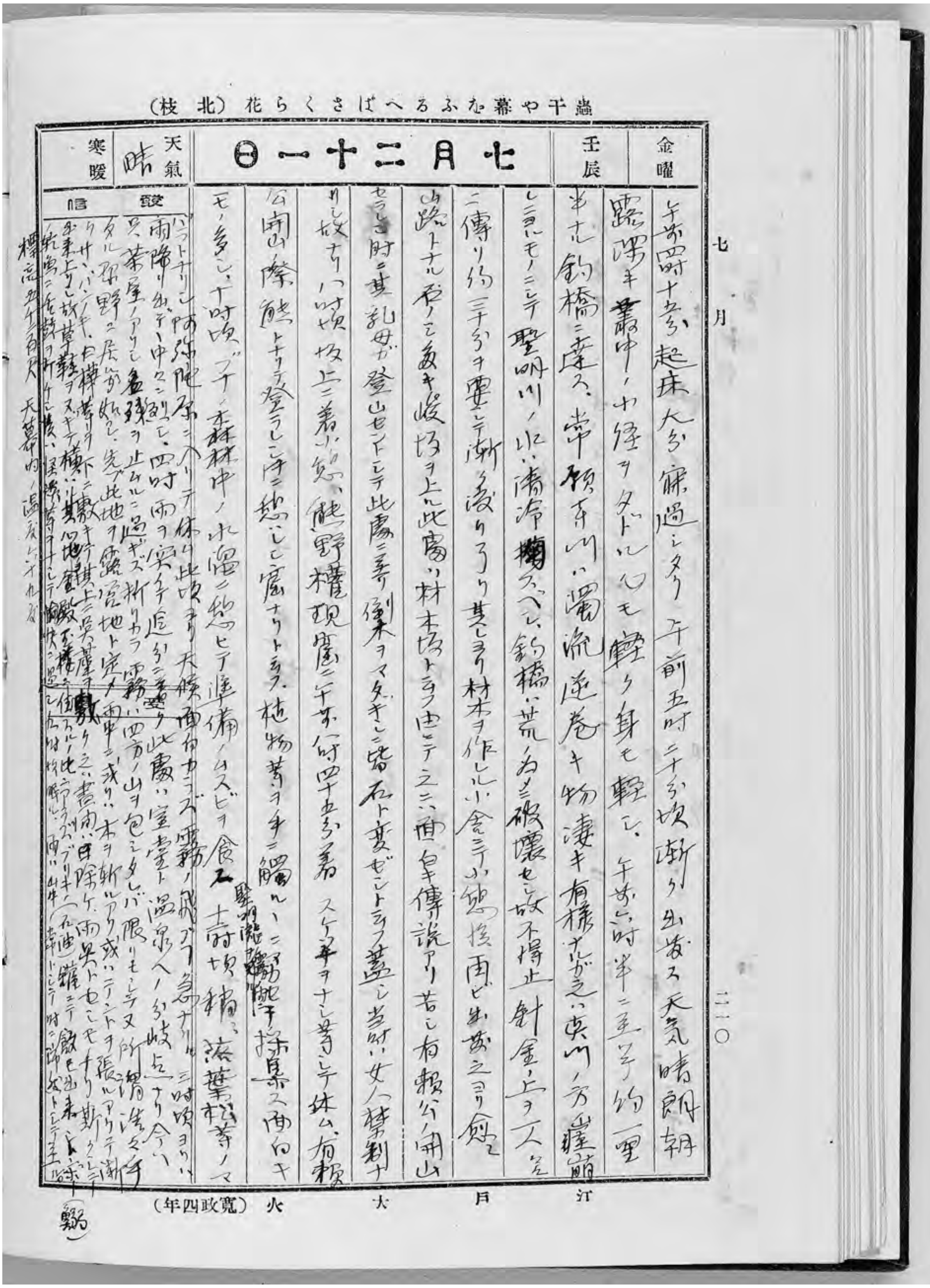
信仰　飛騨ノ境ニ槍ヶ岳ヲ望ム其形眞ニ其名ニハカヽ　帰途ハ雪ノ上ニ

ニ笑薩ヲ引キテ氷ノ滑ヲシテ下山スハ半頃眠ル

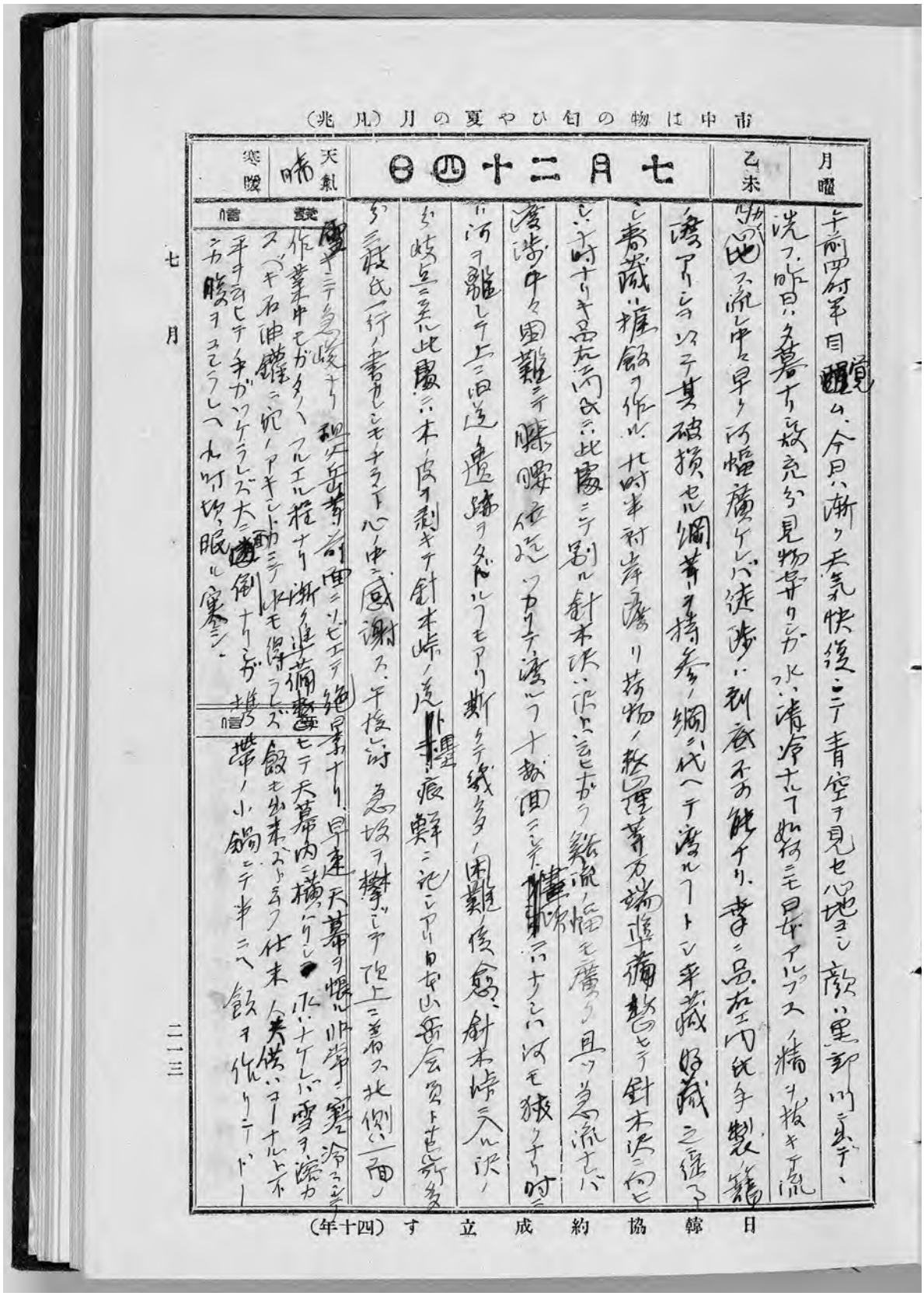
七月　二二一

図３　旧侯爵木戸家資料　明治四十四年　當用日記（国立歴史民俗博物館所蔵）

7月21日


蟲干や蓋なふるへばさくら花（北枝）
金曜
壬辰
七月二十一日
天氣　晴
寒暖
發信
七月
二一〇
午前四時十五分起床 大分寐過シタリ 午前五時二十分頃漸ク出發ス 天気晴朗 朝
露深キ叢中ノ小径ヲタドル 心モ軽ク身モ軽シ 午前六時半ニ至ル 約一里
半ナル釣橋ニ達ス 常願寺川ハ濁流逆巻キ物凄キ有様ナルガ之ハ真川ノ方崩
レニヨルモノニテ聖明川ノ水ハ清冷掬スベシ 釣橋ハ荒ムタメ破壊セシ故不得止針金ヲ人夫
ニ傳リ約三十分ヲ要シテ漸ク渡リ了リ 其レヨリ材木ヲ作ル小舎ニテ小憩 後出發之ヨリ愈
山路トナル 登ルモノヽ多キ峻坂ヲ上ル 此處ハ材木坂トテ之ニハ面白キ傳説アリ 昔シ有頼公ノ開山
セラレシ時ニ其乳母ガ登山セントシテ此處ニ来リ 材木ヲマタギシニ皆石ト変ゼシトテ 蓋シ当時ハ女人禁制ナ
リシ故ナリ 八時頃坂上ニ着キ小憩ス 熊野權現處ニ午前八時四十五分着 スケッチナシ昔ノ休ム有頼
公開山ノ際熊トナリテ登ラレシ時ニ憩ハレシ處ナリトテ 植物等ヲ手ニ觸ルヽ 採集ス 面白キ
モノ多シ 十時頃ブナノ森林中ノ水溜ニ憩ヒテ準備ノムスビヲ食ス 十一時頃 精ニ落葉松等ノマ
[illegible]
(寛政四年)

7月24日



市中は物の匂ひや夏の月（凡兆）

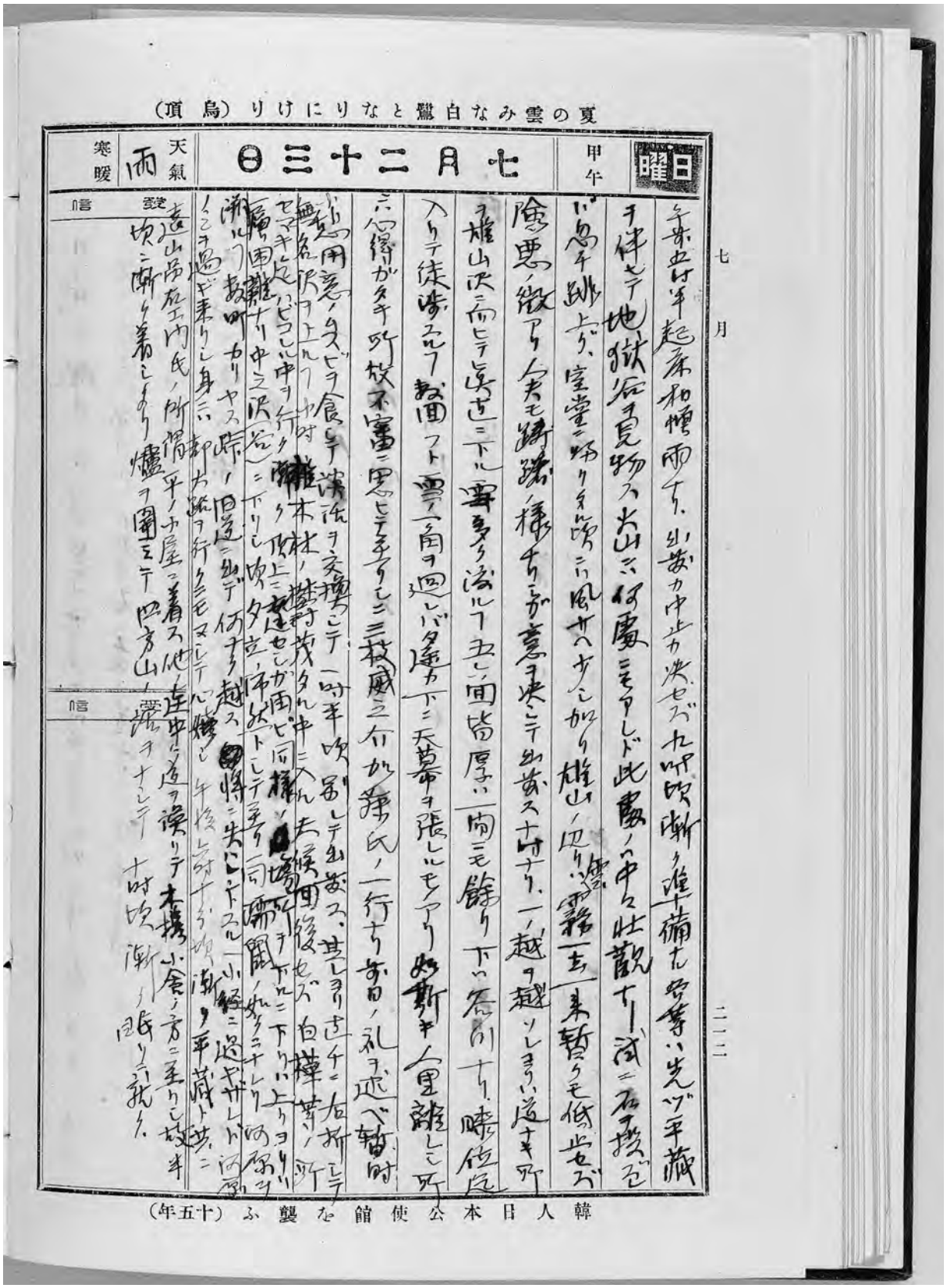
月曜	乙未	七月二十四日	天氣 晴	寒暖

十前四分半目覺ム、今日ハ漸ク天氣快復ニテ青空ヲ見セ地ヨシ敵ハ里部川ニテ、洗フ所只々暮ナリ敵充分見物ヲ為リガ水ハ清冷ナレ如何ニモ日本アルフス ノ精ヲ拔キテ流ル 此ハ流ル中々早ク河幅廣ケレバ徒渉ハ到底不可能ナリ、幸ニ品川氏ヲ製ノ舟 渡アリシヲ以テ其破損セル個所ヲ持参ノ綱ニ代ヘテ渡ルコトヨシ平藏好藏之ニ從フ 書藏ハ糧飯ヲ作ル 此時本村岸邊リ持物ノ整理等方端準備整ヒテ針木沢ニ向ヒ 出ル時ナリキ品川氏ハ此處ニテ別ル 針木沢ハ沢ト云ヒガラ難流ノ幅モ廣ク且ツ急流ナレバ 渡渉中々困難ニテ勝ノ位置ニカリテ渡ル 十数回ニテ漸ク対岸ニ上ル 此ハ中々狡猾ナリ 河ヲ離レテ上ニ出ル道路ヲ辿ルモアリ 斯ク迄多ノ困難ノ後急、針木峠ニ入ル沢ノ 分岐点ニ至ル 此處ニ木皮ヲ剥キテ針木峠ノ道ヲ標 痕跡ニ記シアリ 日本山岳会員ト其所多 分ニ教ヘ一行ノ書カレシモナラト心中ニ感謝ス 午後六時 急坂ヲ攀ヂテ頂上ニ着ス 北側ノ面ノ 雪キテ急峻ナリ 殆ト岳等前面ニ比シテ絶壁ナリ 早速天幕ヲ張リ 非常ニ寒冷ニテ 作業中モガタ〳〵フルエル程ナリ 漸ク準備整ヒテ天幕内ニ横ハリシ 此ハナケレバ雪ヲ踏カ ヌベキ石油鑵ニ穴ノアキシトカニテ ルモ得ラレズ 飯モ出来ズトテフ仕末 人夫供ハコーナルトオ 平ヲ云ヒテ手ガツケラレズ大ニ倒ナリガ 帯ノ小鍋ニテ米ニヘ飯ヲ作リテドー ニカ腹ヲコヲラシヘ九時頃眠ル寒シ

日韓協約成立す（四十年）

図４　旧侯爵木戸家資料　明治四十四年　當用日記（国立歴史民俗博物館所蔵）

7月23日

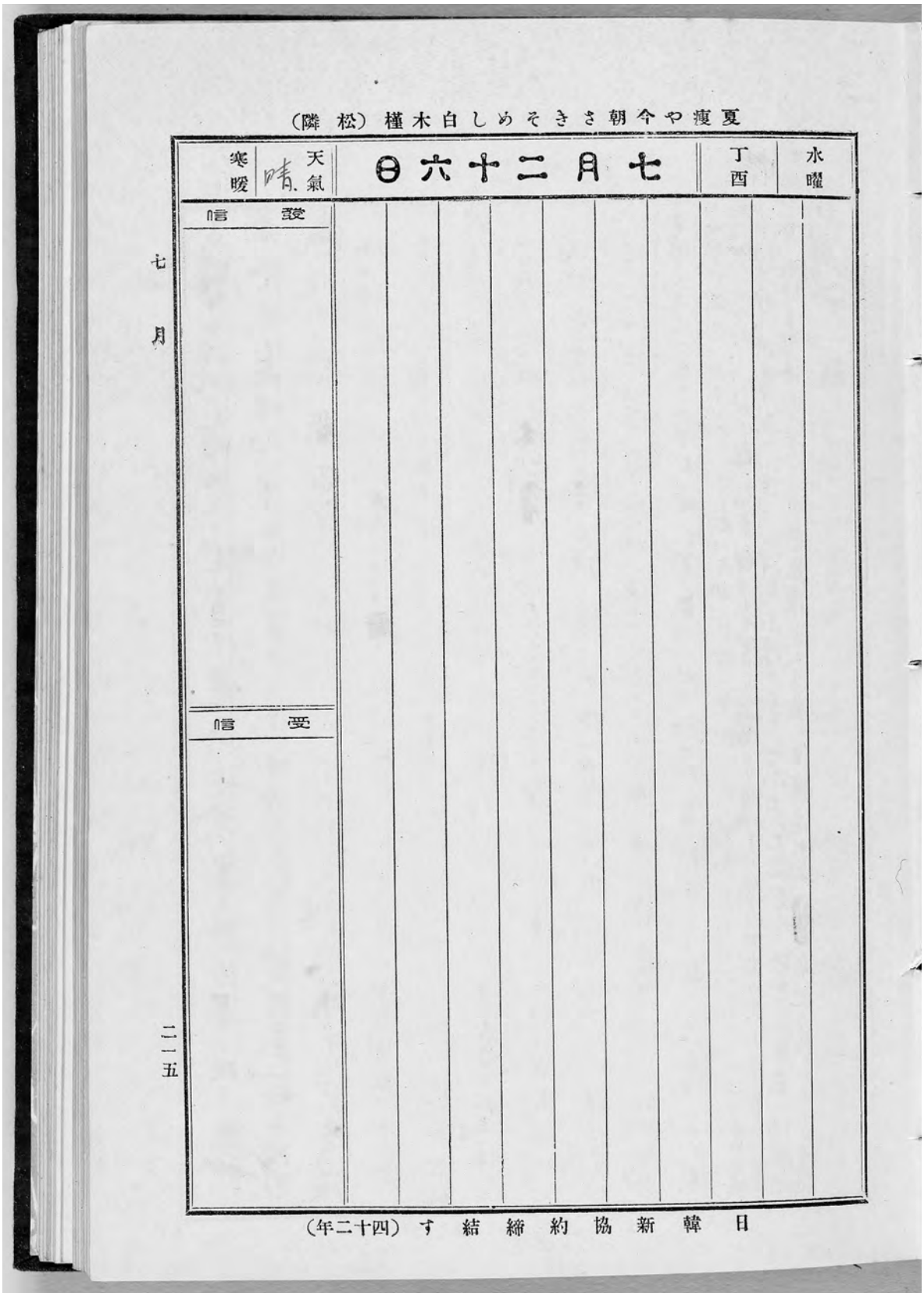


夏の雲みな白鷺となりにけり（烏頂）

七月　二十三日　日曜　甲午　天氣　雨　寒暖

韓人日本公使館を襲ふ（十五年）

7月26日


夏痩や今朝さきそめし白木槿（松隣）

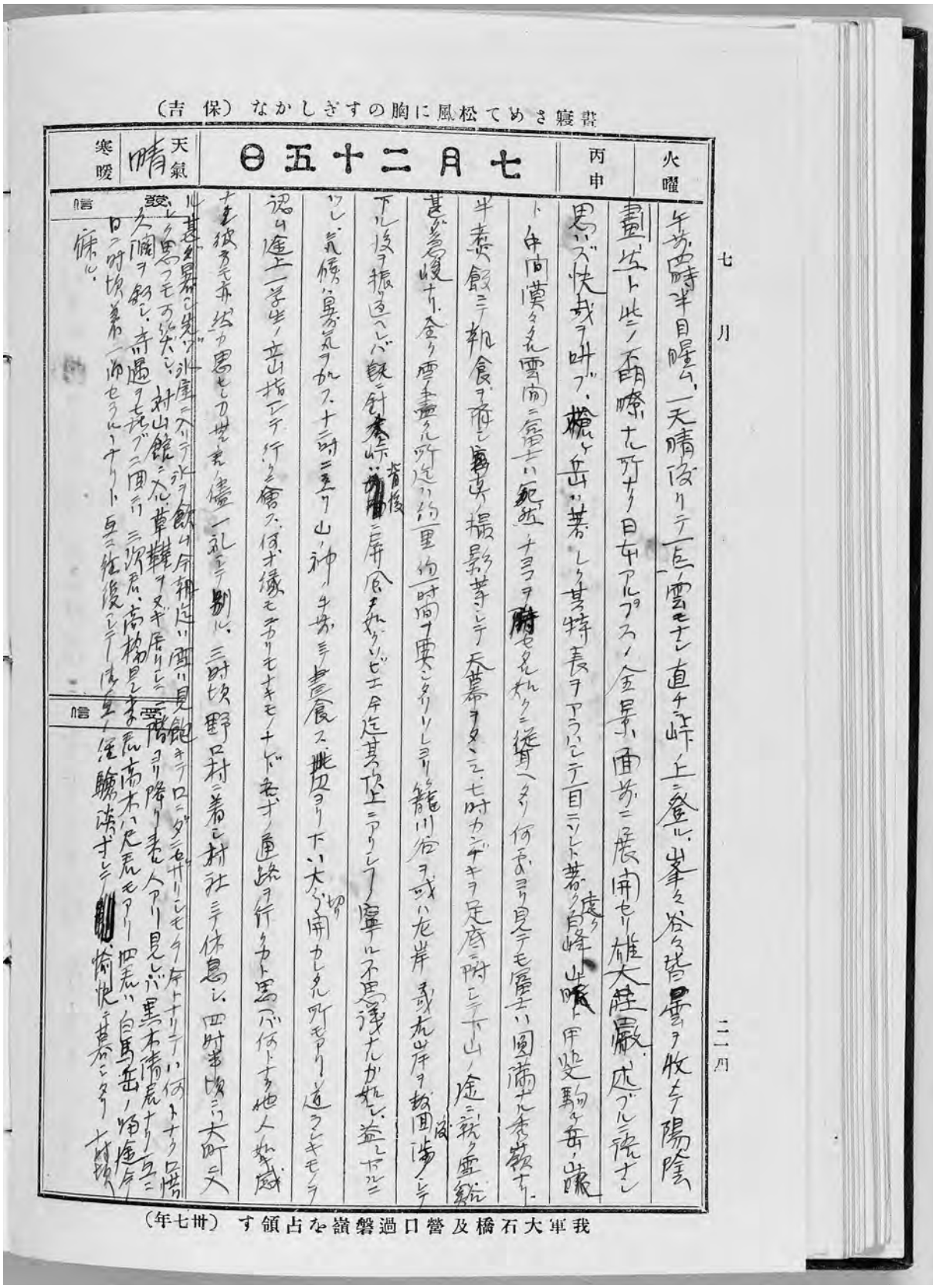
寒暖	天氣 晴	七月二十六日	丁酉	水曜
受信				
受信				

七月二一五

日韓新協約締結す（四十二年）

図５　旧侯爵木戸家資料　明治四十四年　當用日記（国立歴史民俗博物館所蔵）

7月25日



七月二十五日　火曜　丙申　天氣　晴　寒暖

午前四時半目覺ム、一天晴渡リテ左ノ雲モナシ直チニ峠上ニ登ル、峯々谷々皆雲ヲ被テ陽陰畫出ト些ノ霞嶝ナル所ナク日本アルプスノ全景面前ニ展開セリ雄大壯嚴応ブル能ハシ思ハズ快哉ヲ叫ブ、槍ヶ岳ハ著シク其特表ヲアラハシテ目ニソト著ク白峰山嶺ト中間漠々タル雲海ニ富士ノ絶巓ナヨヲ聳モ名ハ人ノ從ヘタリ何ヲ見テモ屋ハ圓滿ナル表徴ナリ。半素飯ニテ朝食ヲ畢シ寫真ノ撮影等ニテ天幕ヲタヽミ七時カニ出キヲ足底ニ附シテ下山ノ途ニ就ク盛鉞甚タ急峻ナリ。登リ雪ノ盡ル所迄ハ約里半時間ヲ要シタリソレヨリ龍川谷ヲ或ハ左岸或ハ右岸ヲ越渉シテ下ル坂ヲ振ヲ返ヘレバ既ニ針木峠背後ニ屏風ヲ如クソビエ今迄其頂上ニアリシヲ窺ハ不思議ナカルシ益ヽ下ルニツレ氣候ノ暑氣ヲカスナニ時ニ至リ山神ノ手前ニテ昼食ス、此辺ヨリ下ハ大ク南カシタル所モアリ道ヲ誤キモノヲ認ム途上一学生ノ立山指シテ行ク者ニ会ヒ偶ヽ縁モ若リモナキモノナレドモ互ヒノ通路ヲ行クト思ハバ何トスル他人ノ感ナキ彼ヲモ亦然カ思セシカ世ノ常ノ儘一礼シテ別ル、三時半頃ニ野口村ニ着シ村社ニテ休息シ四時半頃ニ大町ニ入ル、其名聲ニ先ヅ外屋ニ入リテ飲ム分相応ノ酒ヲ見飽キテ口ニダモ出サリシモタ存ナリテハ何トナク口惜シク思フモ不ル所ナシ、村山館ニ入ル、草鞋ヲ脱ギ居リシニ愛階ヨリ降リ来ル人アリ見レバ黒木清蔵ナリ互ニ久闊ヲ叙シ、寺過ヲ話ヒ二回ニ亘リ三次君、高橋君ニ会ヒ南木ハ足ヲモアリ四名ハ白馬岳ノ頂上ニ日ニ時頃第一番セラレシナリト互ニ往復シテ法ニ経驗談ヲ語リ愉快ニ其夜ヲ明ス

信　信

我軍大石橋及營口過盤嶺を占領す（廿七年）

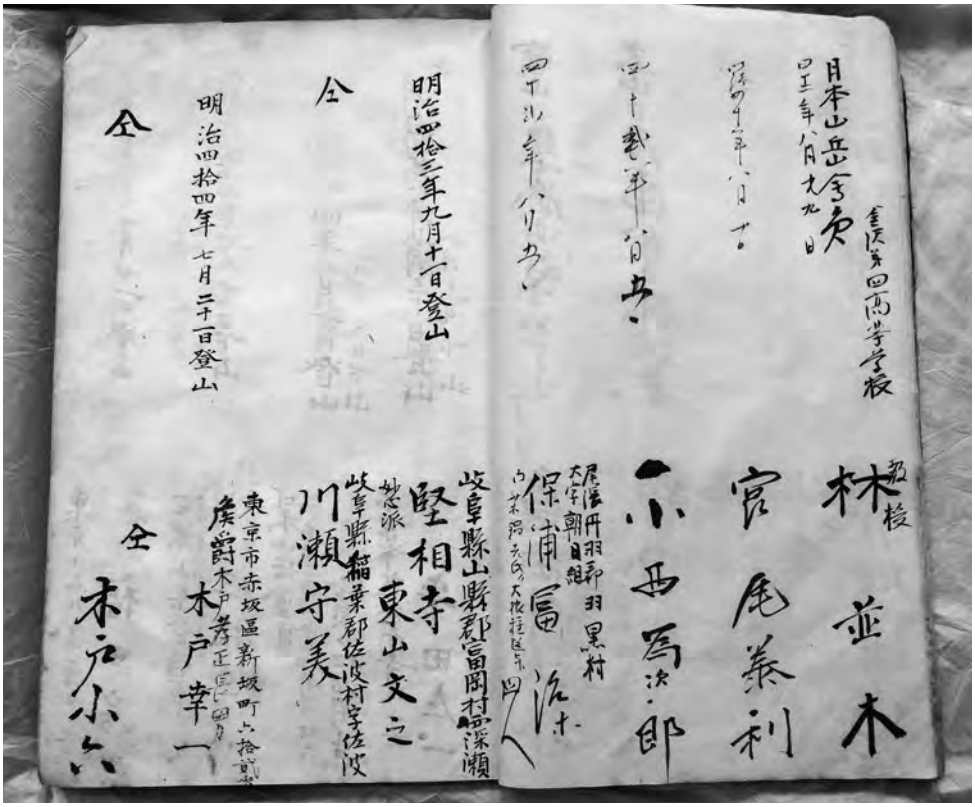


図６　円隆寺所蔵「泉蔵坊宿泊帖」（木戸幸一の署名が見える頁）

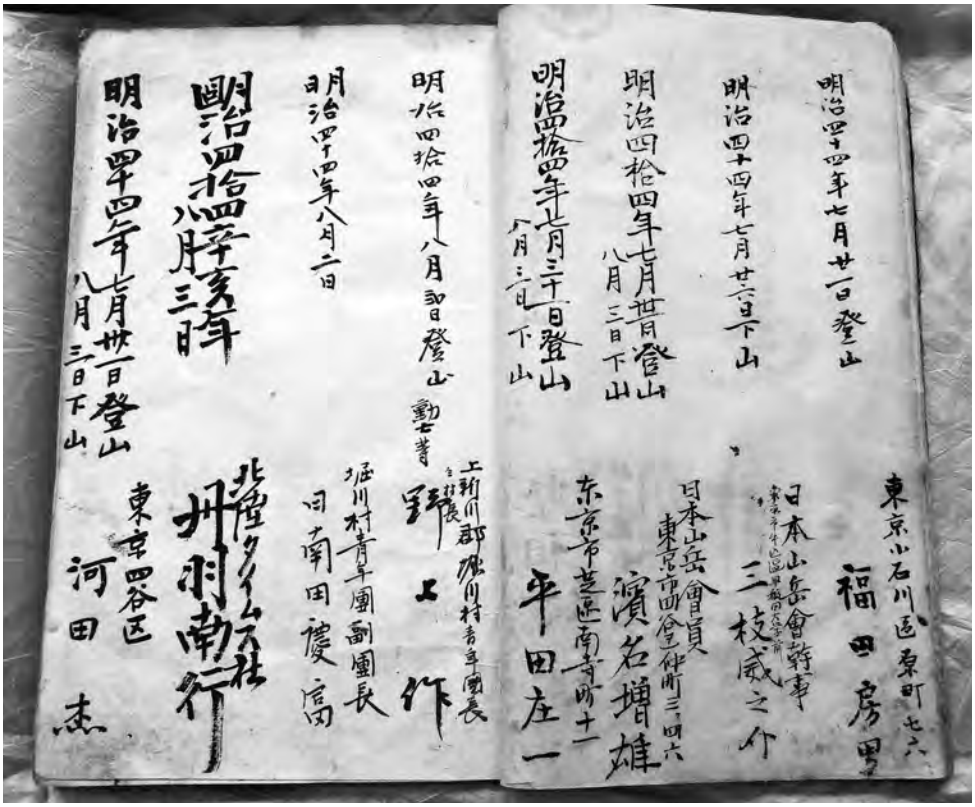


図７　円隆寺所蔵「泉蔵坊宿泊帖」（福田房男の署名が見える頁）

［謝　辞］

木戸幸一の立山登山について、一般社団法人霞会館華族文化調査委員会研究員の松田好史氏から情報提供いただき、翻刻の校訂に多くのご教示を得た。また、登山史研究家の布川欣一氏には帝大・旧制高校・旧制中学の登山をめぐる近代登山史の提要をご教示いただいた。両氏に厚く御礼申し上げる。そして、時代背景をなす情報、特に当時の鉄道交通に関する資料を調査提示された立山博物館の鈴木博喬副主幹と、日記の当該部分を翻刻した吉井亮一旧職員に、謝意を表す。

［主要参考文献］

五十嶋一晃（2013）：『立山ガイド史』、五十嶋商事有限会社。
大井信勝（1908）：『立山案内』、清明堂書店。
学習院輔仁会山岳部・山桜会（2006）：『山桜特別号「学習院登山史（Ⅰ）」1887-1953』、学習院輔仁会山岳部・山桜会。
冠松二郎（1929）：『立山群峯』、第一書房。
木戸幸一（1966）：『木戸幸一日記　上巻』、財団法人　東京大学出版会。
木戸幸一（1966）：『木戸幸一日記　下巻』、財団法人　東京大学出版会。
木戸日記研究会（1980）：『木戸幸一日記　東京裁判期』、財団法人　東京大学出版会。
木戸日記研究会（1966）：『木戸幸一関係文書』、財団法人　東京大学出版会。
国史大事典編集委員会（1990・第三刷）：『国史大事典　第四巻』、吉川弘文館。
国立歴史民俗博物館（2011）：『国立歴史民俗博物館資料目録［10］　旧侯爵家木戸家資料目録』、大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館。
国立歴史民俗博物館（2011）：『企画展示　侯爵家のアルバム　－孝允から幸一にいたる木戸家写真資料－』、国立歴史民俗博物館。
尚友倶楽部・伊藤隆・塚田安芸子〈編集〉（2020）：『木戸侯爵家の系譜と伝統－和田昭允談話－』、芙蓉書房出版。
富山県［立山博物館］（1998）：『山を撮る－山へカメラを向けた人たち－①』、平成10年度特別企画展（春季）展示解説書、富山県［立山博物館］。
富山県［立山博物館］（2000）：「W.Weston の立山登山記録であると伝えられる写真と「INAKA」所収 W.H.Elwin の著作に掲載された 1 枚の写真」、平成10年度企画展「山を撮る－山へカメラを向けた人たち－①」展示解説書－補遺－）富山県［立山博物館］緊急資料調査報告。
富山県［立山博物館］（2008）：「大衆、山へ－大正期登山ブームと立山－」、平成20年度特別企画展示解説書、富山県［立山博物館］。
富山県［立山博物館］（2017）：「宮様、山へ－大正期登山ブームのなかの皇族登山－」、平成29年度後期特別企画展示解説書、富山県［立山博物館］。
広瀬誠（1992）：『立山のいぶき』、シー・エー・ピー。
山と渓谷社（2005）：『目で見る日本登山史』、山と渓谷社。
山と渓谷社（2005）：『日本登山史年表』、山と渓谷社。
吉澤庄作（1922）：『立山遊覧』、中田書店。
吉澤庄作（1925）：『立山』、北陸出版社。